人口問題研究　第三卷　第九號

調査研究

北方圏の民族構成

小山榮三

第一章　ロシア人の北方民族研究

歴史の初めより歐亞二大陸の中間に介在するロシアはその民族的發展に際しアジア民族とヨーロッパ民族との諸勢力と絶えざる爭鬪を行はなければならなかつた。アジア民族としての匈奴、カザール、アヴアール、成吉思汗、ヨーロッパ民族としてのスウエーデン王チヤールス十二世、ナポレオン、一九一四年の獨墺軍、現在の樞軸軍に至るまでロシアは國土侵寇の強敵と死鬪を繰返すことによつてその國土を維持して來たのである。

ロシア人が民族認識と民族政策に於て特に卓越した能力を持つてゐるのはかゝる外來民族侵入者との絶えざる鬪爭と征服の深刻な民族體驗にその基礎を持つてゐるからでもあらうが、又民族工作を實施する爲めに該地方住民の民族性、習慣、風俗及び宗教社會組織等に關する大規模な科學的調査を行ひ、それを基礎として微妙且つ周到なる關係を設置したにも基づいてゐるのである。

一三八〇年クリコヴイに金帳汗國を破つて以來、蒙古人によるロシア統治の瓦解はモスコー帝國をしてスラヴ民族を結成して有力な國家たらしめる最大原因をなした。そしてスペーイン、ポルトガルが西方及び南方に於て海賊商船隊を以て廣大なる新世界の發見に從事してゐた時、ロシアは東方に於てコザツク部隊を前衛として同樣の工作を遂行し約一世紀にして太平洋岸にまで達したのである。

本來から云へばロシア民族のシベリア征服の第一歩はシビル汗國（カ

南方に於ける赫々たる皇軍の戰果は、日本の嚴然たる北方の護りに負つてゐることは云ふまでもない。

民族複合國家たるにも拘らずソ聯は獨ソ開戰の當初に於て一部に豫想されたが如き民族的內部軋轢によつては崩壞せず、長期戰に轉化すると共に益〻熾烈な抗戰意識と頑强な抵抗を示してゐる。

ソ聯は如何にして、多數の異民族をかくの如く强固に統一し、同化したのであらうか。

ナート）を攻略した時に始まる。現にシベリアの名稱も夫れに由來するのである。

註　シベリア Siberia と云ふ名稱が如何にして起つたかに關しては異論があるゴロヴアチエフ Golovacheff はシベリアの語は現在のトボルスク政府のある中部イルチシ河畔に定住し、起源的に蒙古から來た古代部族名 Syryr 又は Sybir から由來したものであると考へてゐる。

この部族はロシアのシベリア征服の前永い間韃靼汗に臣事し、その殘存者もこの部族名をなのり、この名稱は又クチユム汗國の首府——Sibyr 又は Isker—— の名でもあつた。然し Sibyr の語はロシア人が古代都市イスケルを呼んだ名だと考へる時にはチリツコウスキ Chylizzkowski の意見が眞に近いやうに思はれる。彼の說によると東部スラヴ人は全北方地域を Sievier と云ふ言葉を以て呼ぶのを常としてゐた。從つて北方アジアの國竝にその首府イスケルは Sievier, Sivir, Sybir と名付けられたのである。＊

＊ Czaplicka, M. A. Aboriginal Siberia. p. 1

シビル汗國の攻略は露西亞東漸の第二歩たる蠻原民族征服に導いたのであつた。ロシア民族は先づ毛皮狩、毛皮賣買及採金者を次にコザツクを先遣隊として漸次東北に向つて進み其の地方に蟠居した先住民族を驅逐し又は吸收して遂にシベリアを歐露と聯結せしめたのである。＊

＊ 花岡止郎著「ロシアの民族政策」三〇頁

十六世紀迄ウラル山脈から太平洋岸に及ぶ所謂北方圏に屬する廣大な地域に關する正確な事情は歐洲人には知られてゐなかつた。最初に此の地方を發見した者は征服慾と貪慾に滿ちた冒險者達であつて、彼等は原住民に對し飽くなき迫害と搾取とを加へた。前者はコザツクであり後者は毛皮商人（プロミシユレニキ）である。そして彼等の手記が北方圏諸民族の生活事情に關する最初の民族學的報告となつたものであつて、ベーリング Bering が到着する百年以前すでにベーリング海を發見してゐたコザツクのデズネフ Deznev はアメリカ・エスキモまでも記述をしてゐたのである。更にポヤルコフ Poyarkov、カーバロフ Khabarov、アトラソフ Atlasov、スタードキン Stadukhin、チエルノフ Chernov の如き冒險者はユカギール、カムチヤダール、チユクチ、コリヤーク等に關する貴重な資料を殘した。此の中で特に中央政府の注意を惹き、太平洋岸に民族學的調査隊を派遣する機緣を與へたものはカムチヤツカ發見の報告であつた。ピーター大帝は之によつて第一回ベーリング探險隊を派遣して、北アメリカとアジアが陸つゞきであるか否かの問題を解決させようとした。一般にロシアの民族學の進歩は一七三三—一七四三年の所謂カムチヤツカ遠征に負つてゐる。ヨーロツパの歷史に於て學士院がかゝる探險隊の企畫に參加したのは之が最初であり、亦民族學的調査が獨立の科學的部門として含まれたのも之が最初である。著名な學士院會員であつて地歷の教授であるミユーラーが此の探險に於ける民族學的研究を指導した。學士院は之で滿足せず、更に有能な多數の學者を此の探險の幹部として送つた。クラシエニニコフ Krasheninnikov やステーラー Steller の如き人々は此の中にあつた。此の探險は約十年續いた。そして民族學的調査の歷史に於て現在最も合理的なものと考へられてゐる調査樣式であるところの最初の滯在調査を行つたのであつた。此の探險の結果は科學に於ける一時代を劃するものである。探險隊の指導者であるミユーラー G. Müller 自身はカムチヤツカに行くことが出來ずイルクツクに留まつてゐたけれども、彼はコザツクや毛皮商人の古文書をシベリアの資料室に發見して非常な貢獻をした。此の記錄は百五十年に

涉る太平洋沿岸の諸部族の歴史及び地理的分布を明らかにするものであつて、千六百四十八年のデズネフ Deshnev の有名な報告書は此の中にあつたものである。ミューラーは之等の記錄を彼のロシア史集成 Sammlung russischer Geschichte に於て使用し、亦フィッシャー Fischer は彼のシベリア史 History of Siberia に於て利用してゐる。此の探險の最も輝しき收穫はステーラーと、クラシエニニコフの研究である。クラシエニニコフのカムチャツカ地方の記述 Description of the land of Kamchatka の第二卷は五〇〇頁から成り、單にカムチャツカの標準的民族學研究論文であるばかりではなく極北の太平洋部族の全圏——カムチャダール、コリヤーク、千島島民、チュクチ、アメリカの近隣部族に關する代表的な著述と看做されるであらう。ステーラー、クラシエニニコフは既にアメリカの住民は何處から來たかと云ふ問題をさへ取り扱ひ、地理的、民族學的資料の比較からアメリカ人はアジアより移住したものであるといふ結論をさへ導き出してゐる。クラシエニニコフは百八十年以前、カムチャダール語とコリヤーク語及びコリヤーク語とチュクチ語の親緣性を明らかにした。彼はチュクチ語はコリヤーク語から派生したものであつて、その差は單なる方言の違ひに過ぎないと述べてゐる。此の問題の終局的解決はジェヅップ Jesup 探險隊のロシア學者に依つて今世紀の始めになされた。まことに之等の早期の探險者が言語學的資料に大なる力點を置いたといふことは驚嘆すべきことである。彼等は各種族の語彙を編纂し、その上方言研究の資料をさへ蒐集した。之等の研究は出版されるやいなや數ケ國語に飜譯され、北東アジア、北西アメリカの民族學に關する唯一の權威あるものと考へられてゐた。クラシエニニコフ、ステーラーの著書は現在に至るまでその科學的價値を維持してゐる。カムチャダールの民族誌に關しては之等の研究者が之を取り扱つた最初の人であり、そして最後の人でもある。何となればその當時既にカムチャダールは殆んど死滅して極く少數の殘存者も又既にロシア化されてゐるのである。現在に於ては彼等は全くロシア人であり、少數の者が其の祖先的言語を維持してゐるに過ぎない。ベーリングの船に乘つてステーラーはアメリカの島嶼エスキモの文化を研究した最初の歐洲人となつた。又日本まで行つたシュパンベルグ Spanberg は北海道及び千島のアイヌに關する資料を集めた最初の人である。之等の島に住んでゐる民族に關しては、千七百十一年以來カムチャツカから此處に逃げて行つたコザックから知識を得てゐた。此の探險は日本人と非常に親交を結ぶことに依つて行はれたものであるが、クボストフ Khrostov 及びダビドフ Davydov の心なき挑發によつて長い間兩國間の關係が惡化した事は遺憾である。第二カムチャツカ遠征の發見は二つの成果を齎した。貿易業者の或る者はこの新しく發見された地域に工場を建設しようとする慾望を持ち、ロシア政府はこの新しい地域をロシア帝國に併合しその住民をロシア臣民としようとした。一七四五—六二年の間に地方に毛皮商人はアリューシャン列島を發見し、その住民に關する最初の報告を蒐集した。一七六三年には毛皮商人であるグロトフ Glotov はカヂャック島を發見した。その時以來ロシア人はエスキモと特殊な關係を結ぶやうになつた。シュパンベルグの書いた地圖に依つてチェルノフ Chernov は貢ぎ物（ヤサック）を集めるために一七六六—六七年に千島に向つて出發した。此處の住民に關する最初の詳細な報告を得る樣になつたのは此の時からであつて、此の時以來ロシア人は遠く蝦夷までもアイヌと絶えざる貿易を營む樣になつた。同時に毛皮貿易企業の地域は千島、北海道及びアメリカ本土にまで擴がり、遂にロシア人はエスキモ部族のみならず北西のインディアン——トリンギット族及びア

サパスカン族――と接觸する樣になつた。ロシアの毛皮貿易のための地域の此の擴張は二つの重要な結果を齎した。第一は毛皮企業を會社組織に結合する樣にしたことである。此の傾向の結果は十世紀の初期に成立した露米商會の組織である。營業を合理的基礎の上に確立し商品の供給を增加するために此の會社は調査隊を派遣したのであるが、之は亦民族學的報告をも蒐集した。他方、中央政府も新しい占領地の要求に應ずるために科學的な新航路調査隊を組織しなければならなかつた。此の航路探險隊はビリングス Billings 及びサリチエフ Sarychev（一七八五―一七九三年）の航海に依つて開れたものであるが、之は學士院がヨーロッパ・ロシアとアジア・ロシアの總括的調査をなさんとして組織した有名な一聯の探險の一部に過ぎない。此の探險は民族學の研究の歷史に於て重要な役割を演じた。學士院は此の探險の指導方針に於て特に慣習、言語、傳說、古物に關するあらゆる物を蒐集すべき指令を與へた。此の航路探險隊は主に海洋學的、自然科學的研究を成したが、同時に廣汎な民族學的調査も實施した。ビリングス及びサリチエフの探險はチユクチの生活及び詳細なユカギール、オホーツク地方のツングース及びアメリカの諸部族（チユガチース、テナイス、アレウト）に關する資料を蒐集した。ローベック Robeck 博士は十二の土語の語彙を編輯した。リジアンスキー Lisianski はクナイ及びウナラスカ諸島のアレウト、カジヤツク島のエスキモの記述を與へた。ラングスドルフ Langsdorff はカジヤツク及びプリンギツトを記述し、更に北海道のアイヌ、カリフオルニア土人をたづね、カムチヤダールに行はれる犬飼養に關する非常に貴重な手記を殘し、更に各地方のアイヌ方言に關し比較言語學的資料を我々に與へた最初の人であつた。ほゞ同じ頃、セント・ピータースブルグのアジア博物館に勤務してゐたクラプロート Klaproth は今迄探險した人々の資料を比較する事に依つて極北の民族はアメリカから來たといふ說を出した。コリマからベーリング海峽に及ぶウランゲル Wrangel の旅行は先づチユクチ及びユカギール、北方ツングースの全地域を橫斷した最初のものであつて、彼は之等の民族の心理學的特異性に關し鋭利な觀察を加へた。そしてチユクチの馴鹿飼養は比較的最近のものであることを結論した。

この探險隊には全然加はらなかつたけれども北太平洋の民族學に非常に貢獻したのは、ザコスキン Zakoskin 大尉と動物學者のボツネセンスキー Voznesenski の二人である。ほゞ同じ頃この二人は北太平洋を訪問した。主に地形學的業績を殘したザコスキンは、ユーコン河及びブスコクヴイム河の沿岸に居住してゐる部落のノルトンサウント・エスキモ並びにアサパスカンの統計及び民族學に關する貴重な資料を蒐集し、それを故國に持ち歸つた。彼は單に海岸地方を調査した以前の旅行者とは異り、奥地に迄深く踏査したのである。彼が最初に注意をした有名な「ポトラッチ制度 Potlatch」の記述は特に注意すべきである。ボツネセンスキーは各種自然科學部門の問題に關し學士院より多數の調査委託を受けたにもかゝはらず、餘暇をさいてチユクチ、コリヤーク、アジア及びアメリカ・エスキモ、アレウト、アサパスカン、トリンギツト、カナダ及びカリフオルニアのインディアン等多數の部族の民族學的資料を蒐集した。此の蒐集物は學士院の人類學、民族學博物館に陳列され、現在に於ても最大の科學的價値を持つてゐるものである。更に宣教師ベミヤミノフ Veniaminov は在來の研究者達と異り――之等の人々は短時間現住民と接觸し、通譯を通じて彼等と話した結果、その言語學的收穫は少數の語彙を記錄するに過ぎなかつた。之に反しベミヤミノフは彼が記述した民族の間に數年間住み、現住民の言語

を完全に話し、所謂定住的調査方法を採用したのである。彼は北太平洋の原住民の間に總計十六年過した。アレウトの間に十年、トリンギットの間に六年居た。彼の布教義務は原住民の物質的、精神的文化の各方面の知識を得る充分なる機會を與へた。有能な鋭い觀察者であつた上に、更に彼は民族學者にとつて特に重要である所の如何にして原住民の信頼と同情をかち得るかと云ふことを知つてゐる人であつた。當時既に其の古い個有の文化を失ひかゝつてゐたアレウトの廣汎な彼の記述は、心理學的分析を加へてゐる。之等の民族は其の民族的特性を全く失つてしまつたので、この民族の消失した文化の研究を可能ならしめる唯一の、そして最後の資料はベミヤミノフの研究業績である。現在に於ても尙ほアレウトに關するベミヤミノフの業績に關してはヘンリー・エリオット H. Elliot がアラスカに關するその著述 (An arctic Prorince: Alaska and the Seal Islands. L. 1880.) に於てベミヤミノフの著作は獨特のものであつて、それ無くしては彼等が此の地域の支配者であつた全時代間にロシア人がなしたことは全く不明の中に迷はなければならなかつたであらうと述べてゐる。トリンギットに對するベミヤミノフの業績に關しては、その著 Die Tlinkit Indianer. L. 1891. に於て彼は原住民の性格、態度、習慣の理解に於ては誰よりも優れて居り、我我はトリンギットの神話の最も完全な蒐集を彼に負つてゐるのである。ロシア人が十九世紀の前半に於て極北太平洋に於て行つた一聯の探險は有名なオホーツク海の南部に於て行はれたミツデンドルフ Middendorff の有名な旅行で終末を告げた。彼はツグール灣に住むギリヤークの最北境地に到達した。更に彼はアムール河の左支流に轉じ、二、三のツングース部族と接觸し最初の興味ある報告を齎した。此の部族の中には彼が詳細に記述した氏族組織、及び言語のマネギール及びネギダールがあつた。かくして十七世紀にロシアのコザックに依つて發見された同じ民族にロシアの一科學者が會つた最初である。最後にコリヤークとチユクチの生活を記述し、カムチャツカの最初の民族學的地圖を書き上げたディットマール Dittmar の探險は十九世紀の五十年代に行はれた。ミツデンドルフに依つて進められたアムール地方の民族の研究は、アムール河の下流地方へロシア人が侵入して來たことで、之はネベルスコイ Nevelskoi が樺太島とロシア本土の間の海峽を發見した後に行はれた。アムール河の下流域及び樺太に住んでゐる民族の非常に正確な記錄を與へた最初の者は、露米商會の使用人であつた。此の報告の主なるものは、ネベルスコイのアムール探險隊に加つた有能な人々に負つてゐる。ロシアの學士院は凡ゆる角度からアムール地方を研究すべく綜合的探險隊を組織した。その中の民族學部門はアムール地方に二年半過したシユレンク Schrenck に委任された。彼のアムール地方の諸部族に關する專門論文は、歷史及び民族學を含む三卷と、言語を取り扱つた二附錄から成つてゐる。シユレンクこそアムール地方の民族學のコロンブスと云ふことが出來る、とレオ・スターンベルグ L. Sternberg が述べてゐる。廣汎な歷史的探求と直接觀察の後に無數のアムール部族の科學的分類を彼は始めて確立し、之等の部族に對し現在尙ほ一般に承認されてゐる所の最初の民族的名稱を與へ、各部族の歷史的、民族學的記述を殘した。以前殆んど知られてゐなかつた部族の數、部族の名前が明らかにされ、その生活が具體的に知られる樣になつた。彼の著作の大部分はギリヤークの民族誌を取り扱つたものであつて、彼の著述は完全なものとして研究的分析のモデルと考へられてゐる。更にシユレンクの材料に依つて東洋學者のブルーベ grube はゴルドの言語を明らかにした。亦シユレンクはアムール地方の頭蓋學に對する先驅的業績を殘した。彼は單なる記述のみ

では滿足せず、更に民族と文化の間の相關々係を發見しようと努力した。あらゆる民族、あらゆる文化は彼にとつては歷史及び比較民族學の新しい問題であつた。彼の之等の問題の取扱ひ方はアムール地方に於ける犬飼養はギリヤーク起原であり、定住ツングース部族は其の家畜を失つた所の以前の馴鹿遊牧民であつた、といふ樣な多數の重要なる問題を明らかにし、更にアイヌと朝鮮人の關係に對する新學說を提出した。彼はウラル・アルタイ民族の代りにパレ・アジアチツクといふ現今一般に承認されてゐる語彙を與へた最初の人である。シュレンク以後アムール地方の科學的研究は漸次盛んとなり、ハバロフスク及びチタの地理學協會の支部としてウラヂオストツクにアムール研究學會の如き學術團體が建設され、亦ウラヂオストツク、ハバロフスク、チタ、アレクサンドロフスクに博物館が建設された。尙ほ太平洋岸の民族に關しロシアの學者に依る多數の價値ある研究が發表されてゐる。先づツングース部落の研究から始めるならば、マーク Maack（一八五五年）はアムール及びウスリーに住む全ゴルド部族を記述し、ブリルキン Brylkin はゴルドの言語辭典と文法を編纂した。特に注意すべきはゴルドのシヤマン敎及び民俗に關する研究を發表したシムケウイツチ Shimkevich 及びロパチンの歷史的調査を含んだ廣汎なゴルドの著作であらう。一九一〇年にはスターンベルグがゴルドの宗敎及び社會組織の研究を發表し、プロトデイヤコノフ Protodiakonov はゴルドの辭典、歌謠、福音書の飜譯を出版した。之等の資料に基いて滿洲研究者のツアハロフ Zakharov はゴルド語は滿洲語と密接な關係があると云ふ結論に達した。ズンガリ・ゴルドの言語に關する資料は一九〇三年にロブロロブスキー Dobrolovski に依つて蒐集された。他の重要なツングース部族の一つはオロチーである。彼等を最初に記述した學者はマルガリトフ Margaritov であつて、彼等の人體計測をも行つた。一八九六年にレオントヴイツチ Leontovich はオロチー語のツムニン方言の辭典を發行した。同じ年にスターンベルグはオロチーの社會組織及び宗敎を研究した。彼は定住ツングース――ゴルド、オロチー、オロツク――の間ではナンニーと自稱してゐる事を明らかにし、親族階級組織の殘存物を發見した。南部オロチーを最初に詳細に研究したのはブライロブスキー Brailovski であつた。亦、アムール地方の有名な旅行者アルセエニエフ Arseniev は約二十五年間彼等の部族を研究した。ネギダールの社會文化及び宗敎に關してはスターンベルグが資料を集め、シュミツト P. Schmidt は彼等の辭典を出版した。トランスバイカリヤ地方のオロチーの民族學はシロコゴロフ Shirokogorov が研究し、特にシヤマニズムに關して優れた報告を發表してゐる。彼は一九二四年に英文の滿洲族の社會組織に關する詳細な卓越した研究を發表した。九〇年代にはイワノフスキー Ivanovski がソロン及びダウルに關し著述をあらはした。現在、學士院の探險隊はアムール盆地に住むサモギール、ネギダールを調査中である。ツングース部族の研究に於て種族的親緣性とその起原の問題に關しては主に支那及び滿洲の歷史的證據に依存しなければならなかつた。この點に關して民族學はロシアの支那學者ワシリエフ Vasiliev、ヒヤチンスク Hyacinth、ゴルスキー Gorski、パラヂウス Palladius の研究のお蔭を蒙らなければならなかつた。パラヂウスはウスリーランドの歷史に關し支那の資料を使用して、七世紀に於て尙ほ支那の影響を受けた文化的滿洲國家渤海が存在してゐたことを明らかにした。チルの支那墓銘飜譯に依つて支那學者ポポフ Popov はアムール地方流域に於ける十五世紀時代の民族分布を明らかにした。考古學は近代及び史的民族誌の補助科學として役立つ。多くの學者が此の分野に活躍した、ブツセ

Busse 及びナダロフ Nadarov が南部ウスリーランドに於て、マルカリトフがアムール灣沿岸に於て、ロパチンが樺太に於て、ポリヤコフ Poliakov が南北樺太に於て、スプルネンコ Supruneuko が南樺太に於て、スターンベルグが北樺太、アムグン、アムール下流に於て、ピルズドスキー Pilsudski が樺太に於て考古學的研究をした。彼等の業績に依つて南部ウスリー並びにアムール地方に於ける歴史的考古學の遺物は支那、滿洲起原のものであることを明らかにした。オホーツク地方及びカムチヤツカに住む北方の馴鹿飼養ツングースに關しては十八世紀末及び十九世紀の始めに多數の旅行者が記錄を殘してゐた。此の資料とスパスキー Spaski（一八二〇年）のノートはヒフナー Schifner の著述の基礎として役立つた。一八九三年—九四年にゴボラス Bogoras はラムート語の資料を集めた。ユカギール、チユクチ、コリヤーク、アジア・エスキモ、ギリヤークの如き太平洋岸に住む古アジア民族群は日本のアイヌを除き殆んど獨占的にロシアの學者に依づて研究された。ロシア人が最初にアイヌと遭遇したのは千島に於てであつた。クラシエニニコフ Krasheninnikov は彼等とその言語を記錄してゐる。ロシアの旅行者ボツネセンスキー Voznesenski は四〇年代に彼等の土俗品を蒐集した。それは現在學士院の人類學、民族學博物館に陳列されてゐる。ラドリンスキー Radlinski は千島語の辭典を殘し、ポロンスキー Polonski は一八七一年に千島に關する學述論文を發表した。樺太アイヌの研究は樺太にロシア人が居留地を設けると直ちに開始された。アムール地方へのシユミツトの探險隊の一員であつたブリリキン Bylkin はアイヌ語の大辭典を編纂した。アイヌに關し特に注意すべきは一八七五年にドブロトボルスキー Dobrotvorski がアイヌ語、ロシア語の對譯辭典を出版したことである。ほゞ同じ頃、アヌツチン Anuchin はアイヌ部族に關する人類學的論文を發表しアイヌはコーカサス人種に屬すると云ふ學說を反駁した最初の人になつた。一九〇三年—〇五年アイヌはピルズドスキー Pilsudski に依つて熱心に研究された。シエロシエブスキー Sieroshevski は北海道のアイヌを研究し、更にギリヤークの民族學的資料を蒐集した。ギリヤークに關する最初の詳細な論文はシユレンクに依つて書かれた。スターンベルグはギリヤークの各方面の資料を集め、特に言語學、社會組織に於て卓越した業績を擧げ、ギリヤーク語はアメリカノイド群に屬すると云ふ重要な結論を導いた。彼のギリヤークに於ける親族階級組織、一方的從兄弟姉妹結婚及び團體結婚の殘存は太平洋の研究に對してのみならず、亦一般民族學にも重要な影響を與へた。此の發見は同樣の社會組織が樺太及びロシア本土のギリヤークのみならず、多少變形されては居るが、ゴルド、オロチー、オルチー、ネギダール、オロツコのツングース部族にまで存在してゐることを明らかにした。その結果殘存物から判斷すると此の組織はウラル・アルタイ民族の大部分に存在し、そしてすべての之等の民族が少くとも家族組織に關する限りに於ては、一方アメリカのインデイアン、他方印度のドラヴイダ人に關係があることを推測せしめた。ギリヤークに關する彼の研究はジエヅツプ探險隊の報告として出版されて居る。ギリヤークの體質人類學はマニゼル Maniser に依つて取り扱はれた。民族學上に於ける太平洋問題の解決に最も寄與した優れた學者はヨヘルソン Jochelson とボゴラスである。北西アメリカと北東アジアの民族の關係を調査すべく行はれたジエヅツプ探險隊に於て、チユクチ及びアジア・エスキモの調査はボゴラスに依つて、コリヤークの調査はヨヘルソンに依つて行はれた。未だ調査されない古アジア部族はカムチヤダールとアレウトのみである。ヨヘルソンは老年にもかゝはらず、此の仕事を引き受け一九〇八年に

ロシア地理學會が組織したシベリア探險隊の民族學部長として三年現地に滯在した。極く少數のアレウトが生存してゐたけれども、その大部分は既にアメリカ化されてゐた。が、彼はその特殊な傳說を蒐集して其れから以前の社會的、宗教的生活狀況を復原した。更に考古學的發掘は過去に存してゐたアレウト文化を明らかにした。同樣に、カムチャダールの研究に於ても彼は同樣の成功を示したのである。彼等の研究に依つて古アジア人の言語的、文化的親緣性はウラル・アルタイよりもアメリカ・インディアンであることが明らかにされた。ロシアに於ける民族博物館の施設の完備と民族學的研究の發達に伴つてその先覺者の意志を繼ぎソビエットの若い學者は更に國策と結びつき新しい民族學的分野を開拓せんと努力してゐるのが現在の學界情勢である。

* Academy of Sciences of USSR. the Pacific. Russian scientific investigation. p. 161 ロシアの學者が北方民族の研究に於て如何なる著作を發表してゐるかをツアプリカ Czaplicka, M. A. Aboriginal Siberia の Bibliography に據り參考までに掲げよう。

（參考書目）

1. 露文著作（ツアプリカの英譯をのみ示す）

Adelung, F. Review of travel through Russia. Petersburg, 1810.—

Adrianoff, A. V. Travels to the Altai and beyond the Sayan Mountains in 1881. Petersburg, 1888.—

Agapitoff, N. Contribution to the study of the beliefs of the aborigines of Siberia. E. S. S. I. R. G. S., 1884.—

Agapitoff and Khangaloff. Materials for the study of Shamanism in Siberia. E. S. S. I. R. G. S. Irkutsk, 1883.—

Album of a traveller through Siberia and Asiatic Russia. Tomsk, 1911.—

Anuchin, D. N. Contributions to the history of relations with Siberia until Yermak. Moscow, 1890.—

—— Among the ice and in the derkness of the polar night. 1897.—

Anuchin, D. Sledges and boats as accessories at the burial ceremony. Moscow, 1890.—

Argentoff, A. Notes of a travelling missionary in the Polar region. E. S. S. I. R. G. S. Irkutsk, 1857.—

—— The Northern Land. I. R. G. S. 1861.—

—— A description of the St. Nicholas Chaun Parish. S. S. I. R. G. S. 1857.—

Aristoff, N. A. Notes on the Ethnic Composition of the Turkic Tribes. L. A. T. Moscow, 1897.—

Bánzaroff, D. The Black Faith, or Shamanism among the Mongols. Petersburg, 1891.—

Bartenyeff, Burial customs of the Ostyak of Obdorsk. L. A. T. Petersburg. 1905.—

Bartenyeff, V. In Far North-West Siberia.—

Bielankin and Zograff. The nations of Russia. 1892.—

Bielayewski. A journey to the Glacial Sea. Moscow, 1883.—

Bielilowski, K. A. Women among the aborigines of Siberia. Petersburg, 1894.—

Bogayewski, P. M. A sketch of the mode of life of the Votyak of Sarapul. Moscow, 1888.—

Bogdanowich, S. I. Sketches of the Chukchee Peninsula. Petersburg, 1901.—

Bogdanowski, A. I. The Siberian community and its rôle from the politico-economical aspect. Tobolsk 1898.—

Bogoras, W. Brief report on the investigation of the Chukchee of the Kolyma district. E. S. S. I. R. G. S. Irkutsk, 1899.—

—— Materials for the study of the Crukchee Language and Folk-Lore, collected in the Kolyma district. I. R. A. S. Petersburg, 1900.—

— Sketch of the material life of the Reindeer Chukchee based on the Con-

datti Collection deposited in the Ethnogr. Museum of the In. Russ. Ac. of Sc. Petersburg, 1901.—

Bogorodski. A medico-topographical description of the Gijiginsk district. Petersburg, 1853.—

Buryat traditions recorded by various collectors. E. S. S. I. R. G. S. Irkutsk, 1890.—

Czekanowski, A. L. Diary of the expedition along the rivers Lower Tunguska, Olenek, and Lena in 1873—5. I. R. G. S. Petersburg 1869.—

Dmitrieff-Mamonoff and Golodnikoff. Note-book of the Tobolsk Government. Tobolsk, 1884.—

Dobrotvorski. Ainu Russian Dictionary. Kazan, 1875.—

Dyachkoff, G. T. The Country of the Anadyr. S. S. A. C. Vladivostok, 1893.—

Dyedloff, V. L. Through Siberia, 1900.—

Falk. Rull collection of scientific travels in Russia. 6 vols. Petersburg, 1824.

Gamoff, I. Sketches of Far Siberia. Khomel, 1894.—

Gedenstrom. Sketches of Siberia. Petersburg, 1830.—

Getchinson. Extinct monsters. 1901.—

Golovacheff, P. M. Siberia : its nature, people and life. Moscow, 1902.—

—— Far-Eastern Russia. Petersburg, 1904.—

Gondatti, N. Traces of Paganism among the aborigines of North-Western Siberia. Moscow, 1888.—

—— Trip from Markova Village on the Anadyr River to Providence Bay on Bering Strait. A. S. I. R. G. S. Khabarovsk, 1898.—

—— The bear-cult among the aborigines of North-Western Siberia. I. S. F. S. A. E.—

Gorokhoff, N. Yurung-Uolan. A Yakut story. E. S. S. I. R. G. S. Irkutsk, 1884—5.—

—— 'Kinitti.' E. S. S. I. R. G. S. 1887.—

—— The Pagan Ideas of the Ostyak. Tomsk, 1890.—

Gruzdneff, F. The Amur : nature and people of the Amur country.—

Hagemeister, I. A. A statistical survey of Siberia. Petersburg, 1854.—

Hekker, N. A. Materials for a description of the physical characteristics of the Yakut. E. S. S. I. R. G. S. Irkutsk, 1896.—

Islavin, V. The Samoyed, their home and social life. Petersburg, 1847.—

Ivanowski, A. A. A Directory of Ethnographical Essays and Notes published in the Siberian newspapers from the beginning. Moscow, 1890.—

—— The Mongol-Torgout. I. S. F. S. A. E. Moscow, 1893.—

—— Anthropological constituents of the population of Russia. Moscow, 1904.—

Ivanowski, I. I. Bibliographical index to books and articles concerning the Chukchee, E. R. Moscow, 1891.—

Jochelson, W. I. On the rivers Yassachna and Korkodon. I. R. G. S. Petersburg, 1898.—

—— Sketch of hunting pursuits and the peltry trade in the Kolyma country. Petersburg, 1898.—

—— Materials for the study of the Yukaghir Language and Folk-Lore, collected in the Kolyma district. I. R. A. S. Petersburg, 1900.—

—— Wandering Tribes of the Tundra between the Indighirka and Kolyma Rivers. L. A. T. Petersburg, 1900.—

—— Past and present subterranean dwellings of the tribes of North-Eastern Asia and North-Western America. Congr. Amer. Quebec, 1906.—

—— Ethnological problems along the North Pacific coasts. Petersburg, 1908.—

—— Notes on the phonetic and structural basis of the Aleut language. I. R. A. S. 1912.—

Jochelson-Brodska, D. L. Contribution to the anthropology of the women of the North-Eastern Siberian tribes. R. A. I. 1907. Moscow, 1908.—

Jytecki. Sketch of the mode of life of the Kalmuk of Astrakhan.—

Katanoff, N. F. A journey to Karagas in 1890. I. R. G. S. 1891.—

—— Ethnographical survey of the Turco-Tartar tribes. Kasan, 1894.—

—— Report on an Expedition from May 15th to Sept. 1st, 1896, in the Minusinsk district of the Yeniseisk Government. Kasan, 1897.—

Kaufman, A. A. Sketches of the peasant household in Siberia. Tomsk,

1894.—
—— Peasant communities in Siberia according to local investigations in 1886–92. Petersburg, 1897.—
—— Siberian migrations at the end of the nineteenth century. Petersburg, 1901.—
Khangaloff, M. N. New materials respecting Shamanism among the Buryat. E. S. S. I. R. G. S. Irkutsk, 1890.—
—— Customary law among the Buryat. E. R. Moscow, 1894.—
—— Cannibal-spirits among the Buryat. E. R. Moscow, 1896.—
—— The marriage ceremony among the Buryat of Unginsk. E. R. Moscow, 1898.—
—— Some data concerning the mode of life of the northern Buryat. E. R. Moscow.—
Khangaloff and Satoplaeff. Tales and beliefs of the Buryats. E. S. S. I. R. G. S. Irkutsk, 1889.—
Kharuzin, A. N. The Kirgis of the Bukeyeff Orda. Moscow, 1889.—
Kharuzin, N. The Noyda among the ancient and the modern Lapps. E. R. Moscow, 1889.—
—— Russian Lapps. Moscow, 1890.—
—— A sketch of the history of the development of Finnic dwellings. Moscow, 1895.—
—— History of the development of the dwellings of the Turkic and Mongolic nomads of Russia. Moscow, 1896.—
—— Ethnography. Petersburg, 1901—1905.—
Khudyakoff, I. A. Verkhoyansk anthology. Yakut tales, songs, and proverbs. E. S. S. I. R. G. S. Irkutsk, 1891.—
Klementz, D. The Archives of the Yeniseisk Museum. Tomsk, 1886.—
—— Types of drums of the Minussinsk natives. E. S. S. I. R. G. S. 1890.—
—— Archaeological diary of a journey to Middle Mongolia in 1891–1895.—
—— Archaeological collections of the Minusinsk Museum.—
Kohn, A. Y. Physiological and biological data concerning the Yakut. Minusinsk, 1899.—
Kosharoff, P. Artistic-ethnographic sketches of Siberia. Tomsk, 1890.—

Kostroff, N. A. Customary law of the Yakut. I. R. G. S. Petersburg, 1878.—
—— A survey of ethnographic information concerning the Samoyed of Siberia. Petersburg, 1879.—
Kostroff, N. K. Concerning some remains of torture and the Ordeal in Siberia. Kieff, 1880.—
Krasheninnikoff, S. P. Description of the country of Kamchatka. Petersburg, 1st ed. 1755, 2nd ed. 1786. 3rd ed. 1818.—
Kroll, M. A. Preliminary report on investigations among the Trans-Baikal Buryat. E. S. S. I. R. G. S. 1896.—
Kulakoff. The Buryat of the Irkutsk Government. E. S. S. I. R. G. S. 1896.—
Kuznietzoff, W. The Aurora Borealis observed at Pavlovsk in 1897.—
Kyber, Dr. Extract from a letter of October 1, 1822, from Nishne Kolymsk to the 'Siberian Messenger'. 1823.—
—— Extract from the diary. 'Siberian Messenger,' 1824.—
Langans. The Buryat. ... 1824.—
—— The Yakut. 1824.—
Lepekhin, I. I. Diary of a journey in 1768–72; vols. 1–3. Petersburg, 1771–1805.—
—— Full collection of scientific travels in Russia; vols. 3–5. I. R. A. S. Petersburg, 1818.—
Lüdtke, T. Journey round the world. Petersburg, 1834—36.—
Maak, R. A journey to the Amur in 1855. Petersburg, 1859.—
—— A journey in the valley of the Ussuri River. Petersburg, 1861.—
—— The Viluysk district of the Yakutsk territory. Petersburg, 1883–87.—
Magnicki. Ancient ceremonies of the Yakut.—
Mainoff, I. I. Some data concerning the Tungus of the Yakut country. Irkutsk, 1898.—
Mainoff, V. N. Sketch of the customary law of the Mordva. I. R. G. S. Petersburg, 1885.—
Maksimoff, In the East; A journey to the Amur in 1860–1. Petersburg, 1864.—

Maksimoff, A. Contribution to the history of the family among the aborigines of Russia. E. R. Moscow, 1902.—
—— Gropu-Marriage. Moscow. E. R. 1908.—
—— Limitation of relations between husband or wife and the relatives of wife or husband respectively. E. R. Moscow, 1908.—
—— A marriage ceremony. Moscow. E. R. vol. 1909.—
—— The change of sex. R. A. J. Petersburg, 1912.—
Malieff, N. Report of the expedition to the Vogul. Kasan, 1873.—
Mamieyeff, S. N. Materials for a Siberian Bibliography. Tobolsk, 1892.—
Margaritoff, V. Kamchatka and its inhabitants. A. S. I. R. G. S. Khabarovsk, 1899.—
Martos, A. Letters concerning Western Siberia. Krasnoyarsk, 1891.—
Maydell, G. v. The answers of the Chukchee Expedition to the questions of Mr. Baer of the Russian Academy of Science. E. S. S. I. R. G. S. 1871.—
—— Travels in the North-Eastern part of the Yakutsk territory in 1868–70. Petersburg, 1893–96.—
—— Within the Arctic Polar Circle. Sketches of the Kolyma country. 'Orthodox Messenger,' 1894–95.—
Mejoff, W. I. A Siberian Bibliography. Petersburg, 1891.—
Melikoff, D. I. Report of the Senior Counsellor of the Yakutsk Territory Regency, D. I. Melikoff, on his inspection of the Kolyma District in 1893.—
Mikhailowski, W. M. Shamanism. S. F. S. A. E. Moscow, 1892.—
Miller, F. A. A description of Siberia with a complete history of events there, especially since the Russian occupation. Petersburg, 1750.—
Mirolyuboff, I. P. 8 years in Sakhalin. Petersburg, 1901.—
Mordvinoff, A. The natives of the Turukhansk country. I. R. G. S. 1860.—
Müller. Sammlung Russischer Geschichte. Petersburg, 1732–64.—
Neimann, K. K. An historical review of the work of the Chukchee Expedition. E. S. S. I. R. G. S. 1871.—
—— A few words on trade and industries in the northern districts of the Yakutsk territory. E. S. S. I. R. G. S. 1872.—

Nil. Buddhism regarded in relation to the Buddhists living in Siberia. Petersburg, 1858.—
Nordquist, O. Numbers and present condition of the Chukchee living on the Arctic shore. E. S. S. I. R. G. S. 1880.—
Novicki, G. A short description of the Ostyak nation.—
Olsuyeff, A. V. A general sketch of the Anadyr district. A. S. I. R. G. S. Petersburg, 1896.—
Orloff. The wandering Tungus of Bauntovsk and East Angarsk. I. R. G. S. 1857.—
Osipoff, N. Ritual of marriage in Siberia. Petersburg, 1893.—
Ostroumoff, N. A Tartar-Russian Dictionary. Kazan, 1892.—
Ovchininnikoff, M. Selection from the materials for the ethnography of the Yakut. Moscow, E. R. 1897.—
Pallas. Travels through various provinces of the Russian empire. Petersburg, 1773–88.—
Patkanoff, S. Traces of paganism among the aborigines of North-Western Siberia. Moscow, 1888.—
—— Materials for the study of the economic position of Russian peasants and the aborigines of Western Siberia. Petersburg, 1888–93.—
—— The ancient life of the Ostyak and their heroes, gathered from their poems and tales. L. A. T. Petersburg, 1891.—
—— Important data for the statistics of the population of Far-Eastern Siberia. Petersburg, 1903.—
—— Essay on the geography and statistics of the Tungusic tribes of Siberia. I. R. G. S. Petersburg, 1906.—
—— Short sketch of the colonisation of Siberia. Russian Annual, 1907.—
—— Concerning the increase of the aboriginal population of Siberia. I. R. A. S. Petersburg, 1911.—
—— Statistical data for the racial composition of the population of Siberia, its language and tribes. Petersburg, 1912.—
Pavlinoff, D. Marriage law of the Yakut. Note-book on the Yakutsk territory. Yakutsk, 1871.—
—— Materials for a Siberian bibliography from 1750 to 1864.—

Pavlinoff, N. M. Note-book of the Irkutsk Government. Irkutsk, 1895.—
Pavlowski, B. The Vogul. Kasan, 1906.—
Pervukhin. Materials for the archaeology of the eastern provinces of Russia. Moscow, 1896.—
Picturesque Russia. Vol. XI, Western Siberia; Vol. XII, Eastern Siberia.—
Piekarski, E. K. Yakut Dictionary. E. S. S. I. R. G. S. Yakutsk. 1899.—
Pilsudski, B. Results of a journey to the Ainu and Oroke of Sakhalin in 1903–5. I. R. A. S. · Petersburg, 1906.—
—— The Ainu. Brockhaus Encyclopaedia.
Pipin, A. N. History of Russian ethnography to 1888. Petersburg, 1890.—
Podgorbunski, L. A. Ideas of the Buryat Shamanists about the Soul. ... E. S. S. I. R. G. S. 1892.—
—— A Russo-Mongolo-Buryat Dictionary. Irkutsk, 1909.—
Polonski, A. The Kuril. I. R. G. S.—
Polyakoff, I. Letters and report on a journey to the Ob Valley. Petersburg, 1877.—
—— The Ostyak and the Ob Valley fisheries. Petersburg, 1878.—
Popoff, V. A Mongol anthology for beginners in the Mongol language. Kazan, 1836.—
Potanin, G. N. Sketches of North-Western Mongolia. I. R. G. S. Petersburg, 1881–85.—
—— Queries concerning the study of the beliefs, proverbs, superstitions, customs and ceremonies of the Siberian aborigines. Petersburg, 1888.—
—— The Tangut-Tibet frontier of China and Central Mongolia. Travels in 1884–86. I. R. G. S. Petersburg, 1893.—
—— A sketch of a journey to Sy-chuan and the Eastern Tibetan frontier in 1892–93. I. R. G. S. Petersburg.—
—— Greek Epos and the folk-lore of Ordynsk. S. F. S. A. E. Moscow, 1894.—
—— Eastern motives in the Mediaeval European Epos. S. F. S. A. E. Moscow, 1899.—
Potanina, A. V. Notes on journeys through Eastern Siberia, Mongolia, Tibet and China. Moscow, 1895.—
Priklonski, V. L. Three years in the Yakutsk territory. L. A. T. Petersburg, 1890–91.—
—— A bibliography of the Yakut country.—
Pripuzoff, N. Materials for the study of Shamanism among the Yakut. E. S. S. I. R. G. S. 1884.—
Pripuzoff, N. P. Notes on the folk-medicine of the Yakut. E. R. Moscow, 1898.—
Przervalski, N. M. The native population of the southern district of the Amur country. Petersburg, 1869.—
—— Mongolia and the Tangut country. Petersburg, 1875.—
Resin, A. A. Sketch of the natives of the Russian Pacific coast. I. R. G. S. Petersburg, 1888.—
Rojdestvenski, A. G. Materials collected by Olsufyeff concerning the physical type of the Chukchee and the Tungus. A. S. I. R. G. S. 1896.—
Samokvasoff, D. Y. A code of customary law among the aborigines of Siberia. Warsaw, 1876.—
Sarytcheff, G. The voyage of Sarytcheff's fleet along the North-East coast of Siberia, through the Polar Sea and the Pacific in 1785–93. Petersburg, 1802.—
—— Capt. Billings' journey through the Chukchee country, from Bering Strait to Middle Kolymsk. Petersburg, 1811.—
Schrenck, L. The natives of the Amur country. I. A. S. Petersburg, 1883–1903.—
Seeland, Dr. The Gilyak. I. S. F. S. A. E. Moscow, 1887.—
Sgibnieff, A. The Tungus of the sea-coast territory, 1859.—
Shashkoff. Shamanism in Siberia. W. S. S. I. R. G. S. 1864.—
—— Folk-tales of the Buryat. E. S. S. I. R. G. S. Irkutsk. 1889.—
Shavroff, V. Concerning the Ostyak Shamans. 'Moscvitanin,' Moscow, 1844.—
Shchukin, N. S. The Yakut. 1854.—
Shimkevich, P. P. Materials for the study of Shamanism among the Goldi. A. S. I. R. G. S. Khabarovsk, 1896.—
—— Moments of Goldi life. E. R. Moscow.—
Shklowski, I. Sketches of the extreme North-East. E. S. S. I. R. G. S. Irkutsk, 1892.—

Shvetzoff, T. The Kalmuks of the Altai. W. S. S. I. R. G. S. XXIII.—
—— Ideas of the Altaians and Kirgis on custom and law. W. S. S. I. R. G. S. XXV.—
Sieroszewski, W. The Yakut. I. R. G. S. Petersburg, 1896.—
Slovtzoff, P. Historical survey of Siberia. Petersburg, 1886.—
Slunin, N. V. The country of Okhotsk and Kamchatka. Petersburg, 1900.—
Smirnoff, I. N. The Cheremiss. Kazan. 1889.—
—— The Votyak. Kazan, 1890.—
Solovieff. Remains of Paganism among the Yakut. 'Siberia' (Annual.).—
Sternberg, L. The Gilyak. E. F. Moscow, 1893.—
—— Specimens of the material for the study of the language and folklore of the Gilyak. I. R. A. S. Petersburg, 1900½—
Unterberger, P. T. The Amur country. I. R. G. S. Petersburg, 1912.—
Usoltseff, Report of the work of the Siberian section of the Imperial Russian Geographical Society for the year 1869. Petersburg, 1870.—
Talko-Hryncewicz, I. D. Contributions to the Anthropology of the Trans-Baikal country and Mongolia. Russ. Anthr. Journ., 1902.—
Tereschenko, A. The Ulus of Khoshotsk. ... 1854.—
Tiernovski, A. A. Materials for a bibliography of Siberia. Tobolsk, 1893.—
Tretyakoff, P. I. The country of Turukhansk, its nature and inhabitants. Petersburg, 1871.—
Troshchanski, V. F. The evolution of the 'Black Faith' (Shamanism) of the Yakut. Kazan, 1902.—
Uvaroff, A., Count. Archaeology of Russia. Moscow, 1881.—
Venyamin. The Samoyed of Mesen. I. R. G. S. Petersburg, 1855.—
Voyeikoff Climates of the earth; especially of Russia. 1884.—
Vrutzevich, M. S. Culture and life of the people of the Yakutsk territory. I. R. G. S. Petersburg, 1891.—
V. S. E. The clan among the Yakut. E. S. S. I. R. G. S. 1898.—
Wereshchagin, G. The Votyak of the Sarapul district of the Viatka Government. Petersburg, 1889.—
Wierbicki. The Natives of the Altai, 1893.—
Wierbicki, V. L. A dictionary of the Altaian and Aladansk dialects of the Turkic language.—
—— A grammar of the Altaian language.—
Wrangell, F. P. Journey to the north coast of Siberia and to the Polar Sea. Petersburg, 1841.—
Yadrintzeff, N. M. The Tartars and Altaians of Chern. I. R. G. S. Petersburg, 1881.—
—— The cult of the bear among the northern aborigines. E. R. Moscow, 1890.—
—— The Siberian aborigines; their mode of life and present condition. Petersburg, 1891.—
Yakobii, A. I. Extinction of the native tribes of the East. Petersburg, 1898.—
Yakushkin, E. I. Customary law among the aborigines of Russia. Moscow, 1899.—
Yakutsk. Note-book on the Yakutsk territory. Yakutsk, 1896.—
Yelistratoff and Ushakoff. West coast of Kamchatka, 1742–87.—
Zakharoff, I. I. Complete Manchu-Russian Dictionary. Petersburg, 1875.—

2. 歐 文 著 作

Adler, Bruno. Die Bogen Nord-Asiens. Int. Archiv für Ethnoft., Bank XV., H. 2, 1902.
—— Der nordasiatische Pfeil. Int. Archiv für Ethnogr., Band XV., H. 1, 1901.
Ahlqvist, A. Unter Wogulen und Ostjaken. Acta Societatis Scientiarum Fennicae, XIV. Helsingfors.
Allen, J. A. Report on the Mammals collected in north-eastern Siberia by the Yesup N. P. Ex. Bull. of Amer. Mus. Nat. Hist., Vol. XIX. New York, 1903.
Almquist, E. Studier öfver Tschuktchernas färgsinne, Vol. I.
de Armand, C. A. The New Era in Russia. London, 1890.
Atkinson, T. W. Oriental and Western Siberia. London, 1858.
Baelz, E. Zur Vor-und Urgeschichte Japans. Zeitschr. für Ethnologie, S. 281–310. Berlin, 1907.

Bancroft, H. H. Native races of the Pacific States of North America. New York, 1883.

Barnum, F. Grammatical Fundamentals of the Innuit language as spoken by the Eskimo of the western coast of Alaska. Washington, 1906.

Batchelor, J. The Ainue of Japan. London, 1892.

—— Afnu-Eng-Jap. Dictionary. Tokio, 1905.

—— Ainus. Enc. of Rel. and Eth., J. Hastings, Vol. I. London, 1908.

Berg. Ueber den Jassak, oder den Fell-Tribut der nomadisirenden Volksstämme Siberiens. Lodz, 1868.

Bird, Isabella. I. Unbeaten Tracks in Japan. 2. Korea and her Neighbours. London and Edinburgh, 1885.

Boas, F. The Central Eskimo. 6th Annual Report of the Bureau of Ethnology (1884–5). Washington, 1888.

—— Zur Anthropologie der nordamerikanischen Indianer. Verhandlungen der Berliner anthrop. Gesellschaft, 1895.

—— Physical Types of the Indians of Canada. Toronto, 1905.

—— Report on the North-western Tribes of Canada. British Association for the Advancement of Science. London, 1891.

—— The Eskimo of Baffin Land and Hudson Bay. Bulletin Amer. Mus. Nat. History, Vol. V, p. 369. Washington, 1901.

—— A. J. Stone's measurements of Natives of the North-west Territories, 1901. Bulletin of the Amer. Mus. of Nat. Hist., Vol. XXI. New York.

—— Tribes of N. Pacific Coast. Am. Arch. Rep. Toronto, 1905.

—— Facial Paintings of the Indians of Norther British Columbia. J. N. P. E.

—— The Mythology of the Bella Coola Indians. J. N. P. E., Vol. II.

—— Kwakiutl Texts. J. N. P. E., Vol. III.

—— The Kwakiutl of Vancouver Island. J. N. P. E., Vol. V.

—— Ueber die ehemalige Verbreitung der Eskimos im Arktisch-Amerikanischen Archipel. Berlin, 1883.

—— The Decorative Art of the Indians of the North Pacific Coast. Washington, 1897.

Bogoras, W. The Folk-lore of north-eastern Asia as compared with that of north-western America. Amer. Anthrop., Vol. IV. New York, October-December, 1902.

—— The Chukchee. Publications of J. N. P. E., Vol. VII (Memoirs of the American Museum of Natural History). New York, 1904–10.

—— The Eskimo of Siberia. Yesup North Pac. Exp., Vol. VIII. New York, 1910.

Boulangier, E. Notes d'un Voyage en Sibérie. Paris, 1891.

Brown, R. Countries of the World. London, 1875.

Buck, Max. Die Wotjäken. Acta Societatis Scientiarum Fennicae. Helsingfors, 1883.

Buckle, H. T. History of Civilization. London, 1857–61.

Buryat, traditions of the recorded by different collectors. East. Sib. Sec. of the I. Russian Georgr. Soc. Irkutsk, 1890.

Buschau, G. Studien und Forschungen zur Menschen- und Völkerkunde unter G. Buschau. Stuttgart, 1907, &c.

von Buschen, M. Bevölkerung des Russischen Kaiserreichs. Gotha, 1862.

Byhan, A. Die Polarvölker. Wissenschaft und Bildung, Bd. LXIII. Leipzig, 1909.

—— Nord-Asien.

Castrén, M. Alexander. Reiseerinnerungen aus den Jahren 1838–44. Vol. I of Nordische Reisen und Forschungen. Petersburg, 1853.

—— Versuch einer burjätischen Sprachlehre. Nordische Reisen und Forschungen, Vol. X. Petersburg, 1857.

Chamberlain, Alex. F. Aleuts. Enc. of Rel. and Eth., J. Hastings. Vol. I. London, 1908.

Chamberlain, B. H. The Language, Mythology, and Geographical Nomenclature of Japan viewed in the light of Aino Studies. ... London, 1895.

Chappe d'Auteroche, J. Voyage en Sibérie fait en 1761, contenant les moeurs, usages, etc. Paris, 1768.

Chylieskowski. Syberja pod wzglezdem etnograficznym, administracyjnym roluiczym i pnemystowo-handlowym. Wloclawek, 1898.

Collins, P. McD. A Land Journey through Siberia. London, 1860.

Cook, James. Voyage to the Pacific O. undertaken. ... for making discoveries in the N. Hemisphere. London, 1784.

Cotteau, E. A travers la Sibérie. Paris, 1888.

Cottrell, .C H. Recollections of Siberia in 1840–41. London, 1852.
Dall, W. H. Alaska and its Resources. Boston, 1870.
—— Tribes of the extreme North-west. Contributions to N. Amer. Ethnology, Vol. I. Geographical and Geological Survey of the Rocky Mountain Region. Washington, 1877.
—— Remains of later prehistoric man. ... of the Aleutian Islands. Smithsonian Contributions to Knowledge, Vol. XXII. Washington, 1878.
—— On masks, tabrets, &c. Third Annual Report B. E. 1881–2.
Deniker. Les Ghiliaks (extr. from Rev. d'Ethnogr.). Paris, 1884.
—— 'Turks' and 'Tatars' (Dict. Univ. de Géogr. of Vivien de St. Martin and Rousselet. Paris, 1894.
Ditmar, C. von. Ueber die Koräken und die ihnen sehr nahe verwandten Ischuktschen. Acad. Scient. Imp. Sain-Pétersburg, Beiträge zur Kenntniss des Russischen Reiches (1839–1900) 1856.
Dundas, L. J. L. (Earl of Ronaldshay). On the outskirts of Empire in Asia. Edinburgh and London, 1904.
Ehrenberg, C. G. Reise nach dem Ural. ... ausgeführt von A. von Humboldt, G. Ehrenberg und G. Rose. Berlin, 1837–42.
Elliott, H. W. An Arctic Province. London, 1886.
Erman, Adolph. Travels in Siberia. London, 1848.
Erman, G. A. Positions gégraphiques de l'Oby depuis Tobolsk jusqu'a la mer glaciale. Berlin, 1831.
—— Reise um die Erde durch Nord-Asien und die beiden Oceane in den Jahren 1828–30. Berlin, 1838.
Farrand, L. Basketry designs of the Salish Indians. J. N. P. E., Vol. V.
—— Traditions of the Chilcotin Indians. J. N. P. E., Vol. II.
—— Traditions of the Quinault Indians. J. N. P. E., Vol. II.
Finsch, O. Reise nach West-Sibirien im Jahre 1876. Berlin, 1879.
Fischer, J. E. Sibirische Geschichte von der Entdeckung Sibiriens bis auf die Eroberung dieses Landes durch die russischen Waffen. Petersburg, 1768.
Fraser, J. F. The Real Siberia. London, 1902.
Gatschet. Klamath Indians of South-western Oregon. Washington, 1890.

Gennep. A. v. De l'emploi du mot 'chamanisme.' Rev. de l'Histoire des Rel. 1903.
Georgi, J. G. Bemerkungen einer Reise im Russischen Reich in den Jahren 1773 und 1774. Petersburg, 1775.
Gerrare, W. Greater Russia. London, 1903.
Gilder, W. H. Ice-Pack and Tundra. New York, 1883.
Gmelin, J. G. Reise durch Sibirien, von dem Jahr 1733 bis 1743. Göttingen, 1751–2.
Golder, F. A. Aleutian Tales. J. A. F. L. 1905.
Gowing, L. F. Five thousand miles in a Sledge. London, 1889.
de Guignes. Recherches sur la navigation des Chinois du eôté de l'Amérique et sur quelques peuples situés à l'extrémité orientale de l'Asie. Paris, 1761.
Harlez, Ch. de. La religion nationale des Tartares orientaux: mandchous et mongols, comparée à la religion des anciens Chinois. Bruxelles, 1887.
Henry, V. Esquisse d'une grammaire raisonnée de la langue Aléoute (translated from Veniaminoff's work). Paris, 1879.
Hiekisch, C. Die Tungusen. Petersburg, 1879.
Hill, S. S. Travels in Siberia. London, 1854.
Hitchcock, Romyn. The Ainos of Yezo. Report of the U. S. National Museum for 1890. Washington, 1892.
—— The ancient pit-dwellers of Yezo. Report of the U. S. National Museum for 1890. Washington, 1892.
Hoffman, W. Shamanistic Practices. Univers. Med. Mag. 1890.
Hoffman, W. J. The Graphic Art of the Eskimo. Report of the U. S. National Museum, p. 764. Washington, 1897.
Howard, B. Douglas. Life with Trans-Siberian Savages. London, 1893.
Humboldt, A. Im Ural und Altai. Briefwechsel zwischen A. von Humboldt und Graf S. von Cancrin aus den Jahren 1827–32. Leipzig, 1869. (Eng. trans. by Macgillivray.)
—— Fragmente einer Geologie und Klimatologie Asiens. Berlin, 1832.
—— Reise nach dem Ural, dem Altai, und dem Kaspischen Meere. ... im Jahre 1829 ausgeführt von A. von Humboldt, G. Ehrenberg und G.

Rose. Berlin, 1837–92.

Jackson, F. G. Notes on the Samoyads of the Great Tundra, collected from the journals of F. G. Jackson, F. R. G. S. ... by A. Montefiore. Journal of the Authrop. Inst., Vol. XXIV, Aug. 1894–May, 1895.

Jochelson, W. The Mythology of the Koryak. American Anthropologist, July–September, 1904.

—— Essay' on the Grammar of the Yukaghir Language. Annals N. Y. Ac. Sc. New York, 1905.

—— The Koryak, J. N. P. E., Vol. VI. New York, 1905–8.

—— Kumiss Festivals of the Yakut. Boas Anniversary Volume. New York, 1906.

—— Past and present Subterranean Dwellings of the tribes of North-Eastern Asia and North-western America. Int. Congr. Amer. Quebec, 1906.

—— The Yukaghir and the Yukaghirized Tungus. J. N. P. E., Vol. IX. New York, 1910.

Johnson, R. 'Certaine Notes unperfectly written by Richard Johnson' in 1556. Hakluyt's Collection (a new ed). London, 1809.

Kaarle, Krohn: Birth: Finns and Lapps. Enc. Rel. and Eth., Vol. II. London, 1910.

Karjalainen, K. F. Zur ostjakischen Lautgeschichte. Mémoires de la Société Finno-Ougrienne, XXIII. Helsingfors, 1905.

Kennan, G. Tent-life in Siberia and adventures among the Koriak and other tribes in Kamtchatka and Northern Asia. London, 1870.

—— Siberia. London and New York, 1891.

Kjellman, F. R. Om Tschuktschernas hushallväxter. Vega-expeditionens vetenskapliga iakttagelser, &c. Vol. I. 1882, &c.

—— Bidrag till kännedomen om Tschuktscherna. Vega-expeditionens vetenskapliga iakttagelser, &c. Vol. II. 1882, &c.

Klaproth. Recherches sur le pays de Fousang, mentionné dans les livres chinois et pris mal-à-propos pour une partie de l'Amérique. 1831.

Kleinschmidt, S. Grammatik der grönländischen Sprache mit theilweisem Einschluss der Labradorsprache. Berlin, 1851.

Klementz, D. Buriats. Enc. Rel. and Eth., Vol. III., J. Hastings. London, 1910.

Koganei. Die Urbewohner Japans. Mitteilungen der deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens in Tokio. Band IX, Teil 3. 1903.

Kohn, A., und Andree, R. Sibirien und das Amurgebiet, Bd. I u. II. Leipzig, 1876.

Kotzebue, Otto. Entdeckungsreise in die Südsee und nach der Beringstrasse. Weimar, 1821.

Krause, A. Die Bevölkerungsverhältnisse der Tschuktschen Halbinsel. Deut. geogr. Blätter, Vol. VI. Bremen, 1883.

—— und Aurel. Die wissenschaftliche Expedition der Bremer geographischen Gesellschaft nach den Küstengebieten an der Beringstrasse. Deutsche geographische Blätter, Vol. IV, V. Bremen, 1881.

—— —— Die Expedition der Bremer geographischen Gesellschaft nach der Tschuktschen Halbinsel. Deutsche geogr. Blätter, Vol. V. Bremen, 1882.

Kuznétrof. Age de la pierre an Japon. Matér. hist. homme, p. 31. Toulouse-Paris, 1879.

Landor, A. H. Savage. Alone with the Hairy Ainu. London, 1893.

Langsdorff. Bemerkungen auf einer Reise um die Welt in den Jahren 1803–7. Frankfurt.

Lansdell, Dr. H. Through Central Asia. London, 1887.

—— Through Siberia. London, 1882.

Latham, R. G. Native Races of the Russian Empire. 1853, 1854.

Laufer, Berthold. The Decorative Art of the Amur Tribes. Yesup U. P. Ex., Vol. Iv, part I. New York, 1902.

Legras, Jules. En Sibérie. Paris, 1889.

Leroy-Beaulier. L'Empire des Tsars. 1898.

Lesseps. Reise durch Kamtschatka und Sibirien. Berlin, 1791.

Mainoff, V. N. Les Restes de la mythologie mordvine, 1889. Academy, Helsingfors.

Marfin, W. R. Sibirica. Stockholm (Gustav Ehelius), 1897.

Markham, R. On the Origin and Migrations of the Greenland Esquimaux.

Journ of the Royal Geographical Society, Vol. XXXV, P. 87. London, 1865.

Matthews, W. Navaho Myths, Prayers, and Songs. Univ. of California, 1907.

Maydell, G. V. Reisen und Forschungen im jakutskischen Gebiete Ostsibiriens in den Jahren 1861–71. Petersburg, 1893, 1896.

Michie, H. The Siberian Overland Route. London, 1864.

Middendorff, A. Th. Sibirische Reise. Petersburg, 1848–75.

Müller, Friedrich. Allgemeine Ethnographie. Vienna, 1873.

—— Grundriss der Sprachwissenschaft. Vienna, 1876–88.

Müller, Rt. Hon, Friedrich Max. The Science of Language. London, 1891.

Müller, J. B. Leben und Gewohnheiten der ostjacken. Berlin. 1720.

Müller, T. Unter Tungusen und Jakuten. Leipzig, 1882 (F. A. Brockhaus).

Munkacsi, B. Ältere Berichte über das Heidenthum der Wogulen und Ostjaken. Keleti Szemle, III. Budapest, 1902.

—— Die Weltgottheiten der wogulischen Mythologie. Keleti Szemle, VII–X. Budapest, 1906–9.

—— Götzenbilder und Götzengeister im Volksglauben der Wogulen. Ibid. VI. Budapest, 1906.

—— Seelenglaube und Totenkult der Wogulen. Ibid. VI. Budapest, 1905.

Murdoch, John. On the Siberian Origin of some customs of the Western Eskimo. Amer. Anthropologist. Washington, 1888.

—— Ethnological Results of the Point Barrow Expedition. General Report of the Bureau of Ethnology. Washington, 1892.

Nelson, E. W. The Eskimo about Bering Strait. Eighteenth Annual Report of the Bureau of Ethnology. Washington, 1889.

Nordenskiöld, Freiherr A. E. von. Die Umsegelung Asiens und Europas auf der Vega. Leipzig, 1882.

—— The Voyage of the Vega round Asia and Europe (trans. A. Leslie). London, 1886.

Nordquist, O. Tschuktschisk ordlista. Vega-expeditionens vetenskapliga iakttagelser, &c., Vol. I. Stockholm, 1882, &c.

—— Anteckningar och studier till Sibiriska Tshafskustens däggdjursfauna. Vega-expeditionens vetenskapliga iakttagelser, &c. Vol. II. Stockholm 1882, &c.

Peasonen, H. Über die türkischen Lehnwörter im Ostjakischen. Finnisch-ugrische Forschungen, II. Helsingfors, 1902.

—— Über die ursprünglichen Seelenvorstellungen bei den finnisch-ugrischen Völkern. ... Journal de la Société Finno-Ougrienne, XXVI. Helsingfors, 1909.

Pallas, P. S. Reise durch verschiedene Provinzen des Russischen Reichs, I–III. Petersburg, 1771–6.

—— Sammlungen der historischen Nachrichten über die mongolischen Völkerschaften. 1787.

—— Travels through Siberia and Tartary. London, 1788.

Patkanoff, S. Die Irtysch-Ostjaken und ihre Volkspoesie. I. R. A. S. Petersburg, 1897, 1900.

—— Dépouillement des données sur la nationalité et classification des peuples de l'Empire russe d'après leur langue. Petersburg (Cent. Stat. Com.), 1899.

—— Aperçu statistique et ethnographique de la province de l'Amour. Petersburg, 1901.

—— Essai d'une statistique et d'une géographie des peuples paléoasiatiques de la sibérie. Petersburg (Gen. Stat. Con.), 1903.

Pauly, Th. de. Description ethnographique des peuples de la Russie. Petersburg, 1862.

Perouse, J. F., Galaup de la (Count). A Voyage round the World in 1785–8, edited by M. C. A. Milet-Mureau. Translated from the French. London, 1798.

Petroff, J. Report on the Bopulation, Industries, and Resources of Alaska. Report U. S. Census, 1880.

Pfizmaier, A. Die Sprache der Aleuten und Fuchsinseln (translated from Veniaminoff's work). Reprinted from the 'Sitzungsberichte der phil-hist. Klasse der Kais. Akademie der Wissenschaften. Vienna. 1884.

Pietrowski, R. My Escape from Siberia. London, 1863.

Pilling, J. C. Bibliography of the Eskimo Language. Bureau of Ethnology. Washington, 1887.

Pilsudzki, B. L'accouchement, la grossesse et l'avortement chez les indigènes de l'île Sakhaline. Bull. et Mém. de la Soc. d'Anthr. de paris, 1909.

Pilsudzki, B. Schwangerschaft, Entbindung und Fehlgeburt bei den Bewohnern der Insel Sachalin-Giljaken und Ainu. Anthropos, Bd. V. Heft 4. Vienna, 1910.

—— Trad wsrod Gilakow i Ainow. Lud. Lemberg, 1913.

—— Niedzwiedzie swieto u Ainów. Sphinx. Warsaw.

Pinart, A. L. Les Aléoutis, leurs origines et leurs légendes. Actes de la Soc. d'Ethnog. Paris, 1872-3.

—— La Caverne d'Aknaut, île d'Ounga. Paris, 1875.

Preuss, T. Die Begräbnisarten der Amerikaner und Nordostasiaten. Königsberg, 1894 (Hartungsche Buchdruckerei).

Price, M. P. Siberia. London, 1912.

Radloff, Vasily Vasil'evich. Das Schamanenthum und sein Kultus. Leipzig, 1885.

Radloff, W. Aus Sibirien (Leipzig, 1884; 1. Ausg.). Bd. I u. II. 2. Ausg. Leipzig, 1884 (T. D. Weigel).

Reclus, E. Primitive Folk; on 'The Western Innoits, especially the Aleutians.' London, 1890.

Rink, H. The Eskimo Tribes, their distribution and character, specially in regard to language. London, 1887.

—— The Eskimo Tribes. Meddelelser om Grönland, Vol. XI, 1887. pp. 4 ff. Supplement Medd. om Grönl., pp. 19 ff.

Rose, G. Reise nach dem Ural ... (ausgeführt von A. von Humboldt, G. Ehrenberg und G. Rose). Berlin, 1837—42.

Rose, Hermann. Meine Erlebnisse auf der preussischen Expedition nach Ostasien in 1860-2. Kiel, 1895.

Sauer, Martin. An Account of a Geogr. Expedition to tre Northern part of Russia in 1785-94. London, 1802.

Scheube, B. Die Ainos. Yokohama, 1882.

Schiefner, A. Das dreizehnmonatiche Jahr und die Monatsnamen der sibirischen Völker. Petersburg, 1857.

Schott, W. Wohin gehört das Wort Schamane? 2nd book of Altaijische Studien, p. 138. Berlin, 1831.

—— Altaijische Studien. Berlin, 1860.

Schrenck, A. G. Reis nach dem Nordosten des europäischen Russlands, durch die Tundren der Samojeden zum arktischen Uralgebirge, etc. Dorpat, 1848-54.

Schrenck, Leopold von. Reisen und Forschungen im Amur-Lande in den Jahren 1854-6. 4 Bde. Petersburg, 1858-1900.

—— Die Völker des Amurlandes. Petersburg, 1891.

Schwarz, Bernhard. Quer durch Sibirien. Bamberg, 1898.

Seebohm, H. The Birds of Siberia. London, 1901.

Shimkevich, N. M. Zur Pantopoden-Fauna des sibirischen Eismeeres. Mem. Imp. Acad. Sci. Saint Petersburg, 8th series, 1895. &c. Petersburg, 1907.

Siebold, H. von. Ueber die Aino.

Sieroszewski, W. L. 12 lat w kraju Jakutów (12 years in the land of the Yakut). Warsaw, 1900.

—— Du chamanisme. Rev. de l'Hist. des Rel. Paris, 1902.

Smith, H. I. The Archaeology of Lytton, B. C. J. N. P. E. Vol. III.

—— Archaeology of the Thompson River Region. J. N. P. E. Vol. VI.

—— Cairns of British Columbia and Washington. J. N. P. E. Vol. II.

—— Archaeology of the Gulf of Georgia and Puget Sound. J. N. P. E. Vol. VI.

Sommier. St. An Estate in Siberia. Florence, 1885.

Staat. Das Allerneuste von Sibirien. Nürnberg, 1720.

Stadling, J. Shamanismen i Norra Asien. Stockholm, 1912.

—— Shammanism. Contemp. Rev., 1901.

Stem v. J. Die Tschuktschen am Ufer des Eismeeres St. Petersburg 1774.

—— Reise von Kamtschatka nach Amerika mit dem Kom. Bering. Petersburg, 1793.

Sternberg, L. The Orochi. Vladivostok, 1896.

—— The Tribes of the Amur River. Yesup North Pacific Expedition, 1900,

&c. Vol IV. New York.
—— The Cult of Inau. Boas anniversary volume.
—— The Turano-Canowanian System and the Nations of N. E. Asia. Memoirs of the Congress of Americanists, 1912.
Stoddard, C. A. Across Russia. London, 1891.
Stoll, Otto. Suggestion und Hyphotismus in der Völkerpsychologie. Leipzig, 1906.
Strahlenberg. Der nordöstliche Theil von Europa und Asien. Stockholm, 1730.
Swanton, J. R. Haida Texts. J. N. P. E. Vol. X.
—— The Haida of Q. Charlotte Is. J. N. P. E. Vol. V.
Szinnyei, J. Finnisch-ugrische Sprachwissenschaft, 1910.
Talko-Hryncewicz. Memoirs of the Congress of Scientists and Physicians. Cracow, 1911.
Teit, J. The Thompson Indians of British Columbia. J. N. P. E. Vol. IV.
—— The Lillooet Indians. J. N. P. E. Vol. V.
—— The Shuswap. J. N. P. E. Vol. VII.
Teumin, S. Topographisch-anthropometrische Untersuchungen über die Proportionsverhältnisse des weiblichen Körpers. Zürich, 1901.
Thalbitzer, W. A Phonetical Study of the Eskimo Language based on Obesrvations made on a Journey in North Greenland, 1900-1. Copenhagen, 1904.
Trevor-Battye, A. Icebound on Kolguev.
—— A Northern Highway of the Czar.
Wallace, Sir. D. Mackenzie. Russia. London, 1905.
Wasiljev, J. Übersicht über die heidnischen Gebräuche, Aberglauben, und Religion der Wotjaken. Mémoires de la société Finno-Ougrienne, XVIII. Helsingfors, 1902.
Whitney, W. D. Max Müller and the Seience of Language. New York. 1892.
Wichmann, Yrjö. Die tschuwassischen Lehnwörter in den permischen Sprachen. Mémoires de la Société Finno-Ougrienne, XXI. Helsingfors. 1903.

—— Tietoja votjaakien mytologiiasta, Suomi, III. Helsinki, 1893.
—— Wotjakische Sprachproben, I-II. Journal de la Société Finno-Ougrienne, XI, XIX. Helsingfors, 1901.
Wiedemann, F. Classifik. der Bevölkerung des Russ. Reiches nach den Sprachen. St. Petersburger Kalender für das Jahr 1860 (pp. 62-336).
Windt, H. de. Siberia as it is. London, 1892.
Wrangell, F. v. Von dem Verkehr der Völker der Nord-West-Küste von Amerika untereinander und mit Tschuktschen. Beiträge zur Kenntniss des Russischen Reiches und der angränzenden Länder Asiens, Vols. LVII-LXV. Petersburg, 1839.

第二章　北方圈の諸民族

第一節　シベリアの種族

北方圈に屬してゐる北部アジアの廣大な地域は全く異つた四つの地勢を持つてゐる。シベリアは南境に山嶽があり北行するに從つて山嶽帶、曠原帶、森林帶、凍土帶に變化してゐる。山嶽帶はウラル、アルタイ、サヤン、ヤブロノイ、スタノボイ、アムール、カムチャツカの諸山脈で曠野帶は北緯五五度以南のバラバ、ミヌシン、ブラト平野を總括し北緯六五—五五度は森林帶で濕地の密林からなる。エニセイ河の西方ウラル山に伸びた地域及び北緯五五度の北方北極洋岸に及ぶ地域は廣大な單調な沼澤平原であつて森林は北方に行くに從ひ減じ北緯六五度以北は地下數百尺までも凍り夏季にてもわづか表面二尺を融解して沃地と化する北極凍土帶 (Tundra) になつてゐるのである。然しエニセイ河の東部は低く斷續せる高原臺であつて東行するに從ひ高度を增し遂に大高原帶北東端に合してゐる。又北米の北極地方は大平原で海岸鋸齒狀をなし北シベリアと同じく苔原凍土帶であ

つて、ラブラドル、メルヴイル半島、ブーシヤ半島、バツフインランド、グリーンランド、アラスカのユーコン河以北の北極洋岸及びアリユーシヤン(アレウト)列島等のエスキモ居住地が此に屬してゐる。

氣候は共に嚴しく北部は全く典型的な北極氣候を持つてゐる。此の全地域は農業、牧畜には適さないので住民の多くは狩獵、漁獲を營んでゐる。ロシア法ではシベリア土民を遊牧 Brodyachi、半遊牧 Kochevor、定住 Osyedly の三種に分つた。一は主に馴鹿を伴つて漂泊し、二は家畜、漁獲をなし季節的居住を行ひ、三は主に農耕を營むものである。此の全地域の古代住民に關しては何ら知るを得ないのであるが、輓近に於けるシベリア考古學、古人類學の發達は此の解決に對して新しい方向と曙光を與へつゝある。

シベリアの舊古石器時代に關してはカスチエンコ Kastchenko 教授が一八九六年にトムスク附近を發掘して舊石器時代の狩獵民が殺戮し食用とした若きマンモスの骨を發見した。其處には灰、木炭、石刀の破片、モンマスの燒かれた定骨片があつた。

一八八四年に發見されたもう一つの舊石器遺跡はクラスノヤルスク附近のアフオントヴア Afontova 山麓にサヴエンコフ Savenkov 教授が發見したものである。此處で發見された遺物は現今レーニングラードの學士院人類學土俗學博物館 Muzeia Antropolgü i Etnografü Akademü Nauk に陳列されてゐる。ロシア學士院は更に一九一四年此の發掘の續行を彼に依囑したが中途にして彼は死亡して了まつたのである。ペトリ Petri 教授の鑒定に依ればサヴエンコフの蒐集品は舊石器と新石器との二文化を示してゐるのである。一九一九年からサヴエンコフの事業をソスノフスキ Sosnovsky、とフオン・メルハルト Von Merhart 等が繼承した。彼等はクラスノヤルスクの南方エニセイ溪谷を發掘して舊石器時代末期の特徴を示してゐる小石器加工品(シクロヂシング)を發見した。然し此の同じ水準に前期舊石器時代のものと後期舊石器時代のものとが發見されてゐるのでメルハルトは現在のところエニセイの舊石器文化はシベリアのものと同じく後期舊石器時代に屬してゐると結論してゐるのである。更にクラスノヤルスクからミヌシンスクに及ぶ三三〇哩のエニセイ溪谷に於ては二〇個所の舊石器時代遺跡が報告されてゐる。

又オブ地方からも舊石器時代遺跡が發見されてゐるのであつてコピトフ Kopytoff は一九一一年に舊河床のフオミンスコエ Fominskoye 村に於て舊石器代層位を發見してゐる。此の遺物は現今ニューヨークの自然史米國博物館 American Museum of Natural History に保存されてゐる。更にチエルスキ Chersky とチエカノフスキ Chekanovsky とは一八七一年にアンガラ Angara 溪谷にオヴチニコフ Ovchinnikov はイルクツク Irkutsk 附近に於て舊石器時代の遺物を發見してゐる。最近ペトリ Petri 教授はヴエルコーレンスク Verkholensk 山(イルクツク附近)を發掘し後期舊石器時代に屬する黃土帶(レース)に典型的遺跡を發見した。彼は之を多くの特異性を示してゐるがマダレニアンに類緣のものだとしてゐるのである。

シベリアの舊石器人は發火法、石器、骨器の製作を知つてゐたことは其の遺物が示してゐるのであるが然し舊石器時代の人骨は未だ全然發見されてゐないのである。

一般にシベリアに於ける石器時代遺跡の二重性は舊石器時代から新石器時代に移行する或る繼續を示すもののやうである。

新石器時代の遺跡はウラル山から太平洋岸に及ぶ全シベリアの各地に散在してゐるので次の如き個所が報告されてゐる。

トボルスク Tobolsk 州のサマロウスコエ Samarovskoye 村（ウヴアロフ Uvaroff）北緯六三度のオブ支流ソスヴア Sosva 河畔（ルデンコ Rudenko）オブ河口（ポリアコフ Poliakoff）北緯約六五度のスチユチヤ Stchutchya 河、オブ河三角洲（ノヴイツキ Novitzky）オブドルスク Obdorsk 村（北緯六七度）、（ウヴアロフ Uvaroff）、エニセイ河口のドウデインスコエ Dudinskoye 村（北緯六九度）、トランスウラル Transurabau 湖岸、ウラル山脈東側、オブ中流、トボルスク南部アンドレエフスキ Andreyeusky 湖畔（スロウツオフ Slovtzoff）、オブ支流のトボル Tobol 河、イシム Ishim 河堤、オブ河の上流（コピトフ Kopytoff）エニセイ河の上流ミヌシンスク Minusinsk °（サヴエンコフ Savenkoff °レドルスキ Peredolsky テフルコーフ Teplovkhov）カムチヤツカ（ヨヘルソン Jochelson）アレウト列島（ヨヘルソン）カンスク Kansk（ヨルモラエフ Yermoleyeff）アンガラ河（オヴチニコフ Ovchinnikoff ソスノウスキ Sosnovsky）イルクツク附近（オヴチニコフ、ペトリ、ヴイトコウスキ Vitkovzky, イヨレネフ Yeleneff 等）レナ Lena 支流のキレンスク Kirensk 地方（コツミン Kozmin）オレクマ Olekma 河堤（オウチニコフ）バイカル Baikal 湖のペスチヤナ Pestchana 灣（ペトク）、バイカル湖のオルコーン Olkhon 島（コーロシクー Khoroshikh）西部トランスバイカリヤ Transbaikalia（タルコ・ヒリンツエウイツ Talko-Hryn cewitz）アムール下流（シロコゴロフ Shirokogoroff）アムール灣（マガリトフ Magaritoff ヤンコウスキ Yankovsky）等がある。

舊石器時代の人骨は上述した如く未だ全然發見されてゐないが新石器時代の人骨は多少發見されてゐる。

ヴイトコウスキ Vitkovsky はアンガラ支流のキトイ Kitoi 河口に於て、オヴチニコフはイルクツク附近のグラスコフオ Glaskovo 村に於て新石器時代墓地を發見した。又ソスノフスキ Sosnovsky はアンガラ河畔のラスプティノ Rasputino 村にサヴエンコフとペレドルスキ Peredolsky はクラスノヤルスク Krasnoyarsk 附近に埋葬地を見出した。此等の人骨測定に依れば新石器時代の北部シベリアには數種の長頭型變種が存在してゐたことを示してゐるのであつて、彼等は更に金屬時代に分化したものらしい。

南部トランスバイカリヤの先史長頭型のチユド Chuds、南部シベリアの長頭のトウムリ（クルガン）建設者、南ロシアの長頭型のクルガン建築者は南の系統に屬してゐるものらしい。ゴロスチエンコ Gorostchenko の計測に依れば現住民のトルコ族、蒙古族體型に適應しないところの特殊な長頭型的體型の存在を確證してゐる。ヨヘルソン Jochelson に依れば現今のアイヌ、エニセイアン族はアジアに於ける此の長頭型系統の殘存者と見做されなければならないものである。而して後來のトルコ、蒙古種の侵入者が此の長頭型シベリア原住民に絶滅させて了まつたのである。尚、南部境地――ミヌシンスク附近のエニセイ河上流――から出た青銅時代の頭蓋は長頭型を示してゐるのである。

實際ウラルから太平洋岸までの北方アジアは十六世紀までは「不明の世界」であり其の學術探險は十八世紀以後に懸る最初に此地域の狀況を報告したものはコザツク、プロミシレニキ（毛皮商人）の人々であつた。

北極洋地方が人種學的に調査されたのはベーリング Bering のカムチヤツカ遠征（一七三三―一七四三）に初まるのであつて其の學術的研究は主に同行した歴史地理教授ミュラー G. Müller に負つてゐる。後ヴオツネセンスキー Voznesenski は更に學士院の命に依つてチユクチ、コリヤーク、アジア、アメリカ・エスキモ、アレウト、アサパスカン、トリンギット、更にカナダ、カリフオルニア、インデイアンの部族から土俗學的資料を蒐集しそ

れを學士院の人類學土俗學博物館に陳列した。又ジエヅップ北太平洋探險隊 Sesup North Paeific Expedition の權威ある調査報告が發表されてゐる。――これらの現存民族は文化的に或は體質的に其の固有なものを失ひつゝあるので最も科學的價値を持つものとして尊重されてゐる。

此圖に屬してゐるシベリアには土着原住民の外にロシアの最初の征服者移民の子孫からなる「古住ロシア人（スタロジール）」があつて歐洲のロシア人「新移民（ノヴショール）」とかなり相違ある二次的體型文化を形成し又原住民と混血を起してゐる。

原住民はフリードリツヒミユラー F. R. Müller が極地人種の呼んだものを含むのであつてシユレンク Schrenck の「古アジアート（パレ）」を意味する――フイン、蒙古、トルコ、サモエド、ツングース系統のものは此に反して近住したもの故「新アジアート（ネオ）」と云ふ――パトカノフ Patkanoff ツアプリカ Czaplicka は對比する兩者に古シベリア人、新シベリア人、ハツドン Haddon は古北極人（パレアクティクス）、新北極人（ネオアクティクス）の語を與へ、ヨヘルソン Jochelson はアメリカノイド、モンゴロイドの稱呼を與へてゐる。

古アジア人は太古のアジア住民であつて其の總計三萬二千に過ぎないが他のアジア人に對して特種の位置に立つてゐるものである。十個の小民族の總稱である。

本系に屬する種族はツアプリカ、ヨヘルソンに依れば

(1)　チユクチ族

北東シベリアのチユコオツキ半島、アナデイル、コリマ河流域からインデイギルカ河上流に及ぶ範域に住居しパトカノフに依ればロシア統治權外にあるものである。人口は一一、七七一（男五、八一一、女五九六）であつてポゴラスは一二、〇〇〇と計算してゐる。彼等は遊牧馴鹿飼養民と定住沿岸居留民とに分たれ總人口の約三、〇〇〇人は漁獲民である。傳說に依れば

馴鹿（レーンディーヤ） Reindeer チユクチ Chukchee の一部は以前アラツエヤ Arazey＝コリマ河間のコリマツンドラを漂泊してゐたのであるが一八世紀以來ロシア人の侵入と共にコリマ河以東に壓迫されたものである。定住チユクチは主にアナデイル下流畔北氷洋沿岸に居住してゐる。

(2)　コリヤーク族

チユクチ居住地の南部アナデイル＝カムチヤツカ半島の中間部オホーツク、ギシギンスク、アナデイル Anadyr、ペトロパヴロウスク Petropavlovsk の四地方に住む。チユクチと同じく馴鹿飼養民と沿岸居住民則ち凍土帶遊牧民と沿岸漁民とに分たれる。ジエヅップ探險隊の調査に依れば人口七、五三〇（男三、八二九、女三、七〇一）である。馴鹿コリヤークは主にギンガ、ペトロパヴロウスク、カムチヤツカの北部に居住してゐる。

沿岸コリヤークはオコーツク州にのみ住んでゐる。之等のコリヤークはロシア化され體質的にはロシア人、ツングース、ヤクートの混血を示してゐる。

(3)　カムチヤダール族

カムチヤダールはカムチヤツカ半島カムチヤツカ州ペトロパヴロウスク郡の南部に居住してゐる。人口は三、五五五でカムチヤダール語は現今殆んどロシア語化されてゐるが尙ほテイギール河 Tigihl River で使用されてゐる北部カムチヤダール方言は多數のコリヤーク語彙を含み、南部方言は千島語と混交してゐる。それでクラシエニニコフ Krasheninnikoff は南部カムチヤダールを千島人と呼んでゐるのである。

現今のカムチヤダールはロシア人の居留民と混血したので多くのものは以前のコリヤーク的相貌を失つてしまつてゐる。同樣のことが南部地方の住民にも云ふことが出來るのであつて體質的に千島土民（則ち北方アイ

ヌ)の影響を受けてゐる。

ヨヘルソン夫人が行つたカムチヤダールの測定はロシア人の混交がカムチヤダールの體質特性に殆んど影響してゐないことを示してゐる。

次の表は計測數と指數を示す。(男一五八人、女一七〇人)

	男性		女性	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
身長	1,597 mm	5,4	1,495 mm	4.6
頭長	188 mm	6,8	183 mm	5.7
頭幅	149 mm	5.7	144 mm	4.8
頭形指數	78.9	2.9	78.5	2.7
顴幅	144 mm	5.7	137 mm	4.3
頭顴指數	96.5	3.3	94.9	3.0

カムチヤダールはキリスト教を信仰する以前には死屍を棄て犬に喰はしめる風習があつたので遺骨の發見が非常に困難であるがヨヘルソン Jochelson はカヴラン河口の窖に於て男女二體の先史代人骨を發見した。頭長は各、一七七粍と一八八粍、頭幅は一三六粍と一四二粍であつて指數は七六・九と七七・九である。

七六・九と七七・九に――ブロカ法に從ひ二單位を加へると――七八・九と七九・九となつて數値は略、現在カムチヤダールの平均頭形指數に等しい。

カムチヤダールは現今尙ほ全くの漁撈民であつて馴鹿飼養を行はない。

チユクチ、コリヤーク、カムチヤダールは相互に緊密に關係し同時にアメリカ原住民と甚だしき親緣性を示してゐる。體質上から云へば直狀毛であつてこれはモンゴロイド、アメリカノイド、インデイアンの特質である。

然し波狀毛も少數チユクチ、コリヤーク、カムチヤダールに現はれてゐるのであつて、之は嘗て南米原住民に波狀毛要素が入つたことを暗示し得るであらう。皮膚色性に關してはモンゴロイドは黃色調を示すのが特徵であるがアメリカノイドはインデイアンと同じく褐色の種々な色調を持つてゐるのである。太平洋の兩沿岸のものは鼻は扁平狀でなく多くの場合秀でてゐる。モンゴロイドの斜眼裂はアメリカノイド、インデイアンには殆んど現はれない、眼瞼皮膚皺襞はあるがこれは白色人との混種に現はれると云はれてゐる。顏幅は頭幅に比較すると廣い。頭形指數が示す如くアメリカノイド(特にカムチヤダール)は廣い頭形の近住モンゴロイドに比較すると狹い頭形を持つてゐる。尙ほアメリカノイドと北部インデイアンとの間には言語、傳說、漁獲法、狩獵法の同一の如き文化相似が存在してゐるのである。

(4) ギリヤーク族

ギリヤークは樺太の北半及び近接の沿海州ウドスキ郡アムール河口附近に散在してゐる。人口四、六四九(男二、五五六、女二、〇九三)。ギリヤークは異質民族に依つて包まれてゐる。樺太に於ては南方からアイヌ、東方からツングース Tungus のオロツコ群に依つて壓迫され大陸に於てはツングース滿洲部族のネギダルツイ・オロチ Negidaltzy Orochi、オルチ Olchi ゴルデイ goldi、サマギール Samagghir、眞正ツングースによつて圍繞されてゐる。

ギリヤークの體質的相貌は其の近住種族と或る程度の親緣性を示してゐるが其の言語に於ける構成、發音、語彙は全く近住部族と相違し、アメリカの

北太平洋沿岸系統と關係してゐる。スターンベルグ Sternberg に依れば明確なギリヤーク體型と云ふものはないのであつて、平均のギリヤークはツングースの變化したモンゴロイド特質に或はアイヌ特質の加はつたものだとしてゐる。顏面はかなり秀でた顴骨を持つ多少卵形で鼻は中長であり眼裂は廣い。「ひげ」は男性に於ては多量である。

平均頭形指數(八六以上)はアイヌ(七七)よりも高いばかりでなく頭形狀もツングース(八二)よりは短頭型である。モンゴロイド標示は女性よりも男性に著しく現はれてゐる。シユレンク Schrenck はギリヤークの原鄕土は樺太であるとしてゐるがスターンベルグ Sternberg は樺太のギリヤークは新來者だとしてゐる。

(5)　エスキモ族

アラスカからグリーンランドまでの全北極洋地域竝にベーリング海のアジア沿岸に居住する人口二五、〇〇〇、アジアのみでは一、三〇八(男六三二、女六七六)である。シベリアのエスキモはコンマンドルスキー Komandorski のアレウトと共にアメリカノイドとして分類される。

ランゲル Wrangel とノルデンスヒヨルド Nordenshiold に依ればエスキモ部族は嘗て全北氷洋沿岸シエラブスキ岬からベーリング海峽まで占めてゐたがチユクチに驅逐されてしまつたものである。

(6)　アレウト族

アラスカのアリユーシアン列島、コンマンドルスキー諸島に住む。然しコンマンドルスキーのアレウトは後來者であつてベーリングが一七四一年に同島を發見した時には無人島であつた。人口五七四、體質、言語、文化共にエスキモと親緣である。ヨヘルソンの考古學的調査に依れば發掘された七九のアレウト頭蓋の平均指數は八二・一で標準偏差は二・七で限域は七八―八八であり、之はロシア領時代以前のものである。生體の一三八人の測定は平均指數八四、標準偏差三・三限域七六―九四である。ブロカ法に依つて二單位を加へて頭形指數修正を行ふと八四・一になるので現住民と古住民とは同じである。ヒルドリツカに依ればエスキモ系統の一部族としてアサパスカン(平均頭形指數八四)と混血したものであると云ふ。

(7)　ユカギール族

ユカギールはヤナ下流、コリマ下流、ヴエルコーヤンスク Verkhoyansk 群に住む。

人口一、〇〇三(男五〇三、女五〇〇)。ツングースと混血してゐるのでアメリカノイドよりモンゴロイドに近い體性を示してゐる。生活樣式はツングースから採用してゐるが、言語傳說はチユクチ、コリヤークに密接な關係のあることを示してゐる。

(8)　チユヴアンツイ Chuvantzy 族

チユアン灣の南、アナデイル河、コルヰムスキ、アナデイルスキ群に住んでゐる。人口四五三(男二三六、女二一七)。

昔時はチユヴアンツイとユカギール Yukaghir とは單一種族を形成してゐたものである。彼等は馴鹿飼養民と犬飼養民とに分つことが出來る。

次の二種族エニセイ、オステイヤク則ちエニセイアンとアイヌは其の人種分類に異說があるが多數の學者は古アジアートに屬さしめてゐるので假に此處に列記することとした。

(9)　エニセイ、オステイヤク族

ウグリアン Ugrian、オステイヤク Ostyak、サモエド・オステイヤク、エニセイ・オステイヤクの明かに異つてゐる三部族がオステイヤクと總稱されてゐるがオステイヤクの用語は眞正オステイヤクのウグリアン・オス

テイヤクに限る方が望ましい。

ヨヘルソンはエニセイ・オステイヤクは單にエニセイアン Yeniseian と呼ぶことを提唱し、クラプロート Klaproth もオステイヤクの用語を排斥してエニセイアンにコット Kott 滅亡したアッサム Assam と韃靼化されたアリン Arin を含めてゐる。エニセイアンはデイン Din と自稱してゐる。近住のサモエド、ウグリアン、オステイヤク、ツングースよりも毛髮色性は黑色の度が淡い。靑色眼のものもあるが之は起源からの特性であるか、ロシア人との混血の結果であるかはまだ決定されてゐない。カストレンに依ればエニセイアンの言語構成はモンゴロイド系統と異なると云ふ。現住地はエニセイ河及び其の支流河畔であつて人口は九八八(男五三五、女四五三)。

(10) アイヌ族

エニセイアンの起源より更に困難な問題はアイヌの起源である。現今樺太南部、北海道、千島に住してゐる。民族學的にシベリア原住民に含める學者が多いが、モンゴロイド、アメリカノイド民族の間に唯一のカウカソイド Caucasoid 部族の存在してゐることが其の學說を紛糾させてゐる。そしてアリヤン、セム、トダ、オーストラリヤ人、メラネシヤ人にさへ其の起源を求めようとしてゐるのである。

此の古アジアートに對する新アジアートは在來一般にウラルアルタイの語が與へられてゐる。之はフインランドの探險家カストレン M. A. Castren がウラル山とアルタイ山との間の地域に住む原住民に與へたものであつた。從つて語原的にはウラルアルタイの用語は地理的なものであつて印度ゲルマンの用語と類似してゐる。(インドのアリヤンとゲルマン民族がアリヤン國の極所を形成してゐると云ふ見解からインドアリヤンの語原は起つた)。ミュラー Müller はウラルアルタイの用語をトツラニヤン系の北方分派に當てシュレンク Schrenk も同樣の見解をとつてゐるのであつてフイン・サモエド、トルコ、蒙古、ツングースの諸種族を包含してゐるがペツシエル Peschel はフイン群にのみ此の用語を限つてゐる。

ウラルアルタイの用語は主に言語學上の意味を有するものであつてフイン語、サモエド語、トルコ語、蒙古語、ツングース語に於ける一定の特質を包含するものである。言語形態學的には此等の言語は漆着語(アグルティナティヤク)に屬するものである。然し乍らウラルアルタイの用語は異なる地域に成立したと考へられる人種を一地域の名稱に包含しようとするものであるが故に非難と反對とがある。

此の故にツアプリカ Czaplicka は新(ネオ)シベリア人をヨヘルソン Jochelson はモンゴロイドの用語をウラル・アルタイ人に換へて用ひてゐる。新(ネオ)・アジアート則ち新(ネオ)シベリア人はウラル・アルタイ民族を意味するものであつて左の五種族を含む。

(一) フイン部族

フイン系民族のシベリアに居住するものは現今は少數であつて大部分はハンガリヤ、歐洲ロシア、スウエーデン、ノルウエーに住んでゐる。然し或るハンガリヤ人はシーベンブユルゲン、ブコウイナ、モルダヴイア、ルーマニヤに住んでゐる。西部シベリア以外のアジアにはフイン族は全く居ないのである。マジヤールの學者は體質學的基礎からフインとモンゴロイドを分離しようとしてゐる。そしてウグロ・フイン語 Ugro-Finnic をゲルマン語と關係せしめようと企圖してゐるが然し疑ひもなく一般の學說に從へば其の體質特性はモンゴロイドである。フインの原鄕土はカストレンに依ればエニセイ州のアルタイ地方である。フ

イン系部族は其の方言に從つてウグリアン、バルテイク、フイン、ペルミアン、ブルガリア人の四派に分つことが出來る。

ウグリアン族

カストレンはウグリアン群中にオブ河の右岸に居住してゐるオステイヤクと、北ウラル山の東側に居住してゐるヴオグールとマジヤールを包含せしめてゐる。人口はマジヤール約九、五〇〇、〇〇〇、オステイヤク一七、二二一、ヴオグール七、四六七である。

フイノウグリヤン民族（シレリウス：Sirilius）

		身長	頭形指數
サモエド	Samoyedes	一五六・八	八三・二七
ラップ	Lapps	一五五・九	八五・三三
ヴオグール	Voguls	一五六・七	七八・三
オステイヤク	Ostyaks	一五六・五	八〇・六八
ハンガリアン	Hungarians	一六二・〇	—
シルエニヤン	Sireyenians	一六三・二	八三・五
ヴオテイヤク	Votyaks	一六二・〇	八一・八六
遊牧チエレミス	Pastoral Cheremisses	一六四・七	八〇・九〇
山住チエレミス	Hill cheremisses	一六五・九	八〇・三三
モルドヴイニアン	Mardvinians	一六四・七	八三・三一
エストニアン	Esthonians	一七〇・〇	七九・〇
フイン族	Finns	一七〇・九	—
サヴオラクシアン	Savolaxians	一六九・六	八一・三〇
北部カレリアン	North Carelians	一六九・六	八二・一五
南部カレリアン	South Carelians	一六九・八	八二・一五
北部オストロボトニアン	North Ostrobothnians	一七〇・三	八二・六
ニーランダー	Nylanders	一七一・四	八〇・五
タヴオスト	Tavasts	一七一・六	八〇・九
南部オストロボトニアン		一七一・九	八〇・〇
眞正フインとサタクンテイアン	Fins Proper & Satakuntians	一七二・四	七九・四
東部カレリアン		一六九・七	八一・四

ウラル以東に於けるフイン族は(a)ウグリアン・オステイヤク族であつてトボルスク郡の北部からオブ河口に及ぶベリオゾフスキ群、スルグウツキイ群、トムスカヤ縣ワユガニエ河流域エニセイ河口に及んでゐる。人口一七、二二一。

(d)ヴオグール族、（マニツア又はスオミと呼ばれてゐる）はベレゾフからトボルスクまでのオブ中流とウラル山の間主にトボルスカヤ縣の西部、ペルムスカヤ縣のウラル山東地域に住してゐる。人口七、四七六。

（二）サモエド部族

カタンガ河口からウラル山までの北極洋地方及び歐洲チエスカ灣に及んでゐる。三分派に分たる。

主に西部シベリア・エニセイスカヤ縣の北部に住し　(a)トボルスカヤ縣、ペリヨゾフスキー郡に於けるものはユラク族、（男二、五一九、女二、八五二）(b)トムスカ縣ナルキムススキー地方及びトムスキ群地部ではオステイヤク・サモエドと呼ばれ（男二、八四三、女二、九六二）(c)エニセイスカヤ縣アルハンスクより東方カタンガ河に至るツンドラ帶に住むものはエニセイ・サモエド及びタウギ Tawgi（男六三九、女六八七）と云はれてゐる。人口一二、五〇二。

（三）トルコ部族

トルコ人種の本部群のみがシベリア圏に屬してゐる。中央群（キルギス・カイザク、カラ・キルギス、ウズベツク、サルト、ヴオルガのタタール

(韃靼人)及び西部群(トルコマン、クウカス、ペルシヤのイラン人、オスマン=トルコ)は東部歐洲、中央アジアに住む。

東部群卽ちシベリア分派は次の種族を含む。

(a)ヤクート族、レナ河とアルダン河の下流、ヤクーツク群、アムール河、樺太までに住んでゐる。トルカンスク Turukhansk 群に住んでゐる明かにツングース起源であるが全くヤクート化されたドルガン族との人口總計は二二六、七三九(男一一三、四〇九、女一一三、三三〇)。

カチンタタール(ミヌシンスク)はヤクートの一部分である。ヤクートは二體型に區別することが出來る。一は純粹の蒙古族で廣額と扁平鼻を有し一は南西シベリアのタタールに近似し狹い長顏と秀た鼻を有してゐる。ヤクートの古代名はウリヤンカーイ Urianikhai であつた

(b)ヤクートを除いたシベリアのトルコ部族はタタール(韃靼人)と一般に呼ばれてゐる。シベリアに住む他の韃靼人は主にトボルスクとトムスク政廳に屬してゐるのであつて人口一七六、一二四と計算されてゐる。住地に依つて左の名稱が附されてゐる。

(イ) トボルスクタタール (三七、六三七) 及びシベリア・ブハールツイ Bukhartzy(一一、六五九)(トボルスカヤ縣)

(ロ) バラバ Baraba タタール(トムスク縣カインスキー郡)

(ハ) チユリマ Chulyma タタール(一一、一二三)(トムスク縣マリインスキー郡)

(ニ) トムスク・クズネツク Tomsko-Kusnetzk タタール(八、一六四)(クズネツキー郡、バルナウリスキー郡)

(ホ) チエルネヴイエ Chernevije タタール(六、三四二)(ビイスキー郡)

(ヘ) テレウト Teleut 人、又はテレンギイト Telengit 人(九、二〇〇)(ビイスキー郡、クズネツキー郡)

(ト) クマンデインツイ Kumandintzy (四、〇九二)クズネツキー郡、ビイスキー郡)

(チ) レベデインツイ Lebedintzy (九〇七)。ショルツイ Shortzy (一、三九〇)(クズネツキー郡)

(リ) キジル Kizyl タタール(七、七五九)(アチンスキー郡)

(ヌ) アバカン Abakan タタール (一一、九七四)及びサガイ Sagai タタール(一九、五七〇)(ミヌシンスキー郡)

(ル) カラガス Karagas (ニジネ・ウヂンスキー郡)これは韃靼化されたサモエドである。

以上全シベリアのトルコ種族、(ヤクートとドルガンを除く)人口は一七六、一二四(男八九、一六五、女八六、九五九)である。

(四) 蒙古部族

(a)西部群はドンガン族とカルムツク族であつて——自らはエリユートと呼ぶ——この蒙古人のシベリアに住んでゐるものは極めて少數である。(一八九七年にはたつた一五人)主に蒙古から接續地の後バイカル州に來たものである。主にトルケスタンに居住してゐる。

(b)東部群卽ち本來(ブロウイー)の蒙古人、此の地方分派カルカー族のみが少數(一八九七年、四〇二)シベリアに住んでゐる。

(c)ブリヤート族ブリヤートは全部東部シベリアの二州トランスバイカリヤとイルクツクに居住してゐる。人口一七七、六三七。

東部則ち眞正蒙古族と西部蒙古族則ちカルムツクとブリヤートは三大蒙古分派を形成してゐる。ブリヤートは大部分遊牧民でありゴビ砂漠を包含する東部蒙古のカールカ Khalkas 部族に最も近緣のものである。戰鬪と移

動の結果西部蒙古族則ちカルムツクは現今ホアンホ Hoang-Ho 河畔からモンチ Monchi 河畔(ドン支流)までのシベリアとラツサ間の廣大な地域に散在してゐる。更に密集した群は歐洲ロシア(アストラハン Astrhkaan カルムツク)、コウカス(テレツク Terk カルムツク)ジユンガリヤ Jungaria(トルグート Torgout)、北西蒙古(アルタイ山と天山間)、アラシヤ Alasha 以西(北チベットのココノール省 Kuku-Nor)に見出される。

東部蒙古族は七十万西部蒙古族は百萬ブリヤートは二八八、五九九と數へられてゐる。學者に依つては第四の蒙古群としてタメルラン Tamerlane(テイムール Timur)がアフガニスタンに遺留したヘザレ Hezare 又はハザラ Hazara を加へる。人口、四十五萬。

(五)　ツングース族

ツングースの原郷土はまだ決定されてはゐないが一般にアムール溪谷から東部全シベリアに擴がつたと云はれてゐる。パトカノフ Pathanoff は西紀七世紀以來アムール河南方で武威を振つた。強力民族の壓迫のために滿洲から北方へ移動したものであると云ふ。一六四四年に清朝を樹立した滿洲族はツングースに類縁の民族である。

現今ツングースは滿洲から北極洋、オホーツク海からエニセイ河の東部流域までの全東部シベリアに分布してゐる。更にツングースの少群はタヅ Taz 河流域のサモエド族間及びカス Kass 河のエニセイオステイヤク間に居住してゐる。人口は七六、五〇四(男三九、三〇三、女三七、二〇一)であつて其の親縁種族の滿洲族は一二、五〇〇人と數へられ朝鮮人はツングースと支那人及び日本人の混血人種と見做されてゐる。

シユレンク教授は十部族を其の方言に從つて四群に分つてゐる。(1)タウル Daur とソロン Solon (2)滿洲族(滿洲族中の支那化されざる小分派)、ゴルデイ Goldi オロチ Orochi (3)オロチョン Orochon マネグリ Manegri ビラル Birar キビ Kibi (4)オルチ Olchi (アムール河下流のマングン Mangun と樺太のオロキ Oroki)ネギダルツイ Negidaltzy サマギール Samaghir コトウイチ教授 Kotwich は滿洲、ツングース部族を方言的親縁性に從つて(1)滿洲族(シブ Sib を含む)(2)固有ツングース(ラムート Lamut を含む)、マナギール Managhir ソロン Solon タウル Daur (3)ゴルデイ群(オルチ、アロキ Oroki オロク Crok (4)サマギール、ナグダ Nagda

(a)プロパーツングース族は所謂ラムートとアムール、オロチョンを含み、東徑六〇度から太平洋まで、北極洋から支那國境までの東部シベリア全域に居住してゐる。卽ちエニセイスカヤ縣、イルクウツカヤ縣、ヤクウツカヤ縣、沿海州、カムチヤツカ州、トランスバイカル州、樺太等。人口六二、〇六八。

(b)他のツングース族、(イ)チヤボギール族、下ツングースカとストニー、ツングースカの間に住む。(ロ)ゴルデイ族、下アムールウスリ江の下流域、人口五、〇一六。(ハ)ラムート族、オホーツク海沿岸。(ニ)滿洲族、ゼエヤ河畔、シベリアには少數存し大部分は滿洲に住む。人口、三、三四〇。(ホ)モネグル族、アムール河中流、東緯一二六度、人口一六〇。(ヘ)オロチ族、ロクー、アムールと太平洋岸の中に住む。人口、二、四〇七。(ト)オロチョン族、オレクマ河に住す。(チ)オロツコ族、樺太の東岸、內地に住む。人口、七四九。(リ)ソロン族、アムール中流の南東徑一二〇度附近等がある全ツングース部族の人口總計は七六、五〇七である。

定住ツングースの大多數はトランスバイカリヤ州アクシヤ Aksha 郡の蒙古境域に沿つて生活してゐるコザツク Cosack である。

第二節　東部シベリア地方

アメリカ・インディアンが北東シベリアからアメリカ大陸に入つたと云ふ事は多數の學者に依つて唱導されてゐる。アメリカには昔から種々の人種が存在してゐた――一部のものは非常に古代に屬してゐる。例へば長頭型古アメリンドの如く――と云ふ事は考古學者が示してゐるのである。從つて之等の人種も嘗つてはシベリアに居住してゐたに違ひない。そしてその蹟跡も現存してゐると推測されるが、その後のアジアの民族大移動に絶滅若しくは不明にされてしまつたらしい。且つシベリアの人種考古學は未だ充分研究されてゐないので其の復原が困難である。

「新人種」の早期北方群の一部は未だ長頭型であつて分化しない體型を示してゐた時に既に遠く漂泊してゐたと考へられるのであつて、我々は彼等を後に原北方人種がそれから派生したところの同一系統のものであると推測してゐる。彼等は長、中頭型種に依つて驅逐され、後者は次に早期短頭型種に依つて驅逐されたものであるらしい。

古代から黄色皮膚の短頭型種は北方移動を繼續してゐた。此の概括が正しいならばシベリア人種史はかなり複雜してゐるものである。

全シベリアを通して廣く分布してゐるのは「古北極洋人種」に屬する異質群である。此は其の以前の體型は不明であるが現今尚ほ強度の長、中頭型の血統を示してゐるものである。カムチャダール族、北部カムチャツカのカラガシ族、更に北方のコルヤツク族、コリマ、アナデイル地方のツングース族、チヤウン灣からヤナ灣までに及んでゐるユカギール族、頭型指數八四・一、身長一・五六米、等が此れに屬してゐる。

稍〻後に來たものは「新北極人」と呼ばれる低き短頭型系統であつてチユクチ族はアジアの極北東にまで進んだ。ツングース民族はエニセイ河から太平洋、北極洋から蒙古境域まで擴がつた。トルコ・ヤクート族は十二世紀にツングース領域に侵入して來た。彼等はインデイギルカ河とヤナ河間、アツパー・レナ盆地及び東方アムール河、アムール海附近に居住してゐる。

東に於てはアムール河が北方ツングースと南方ツングースとの分界をなし、海岸ツングース即ちラムートはオホーツク海沿岸に分布してゐる。此等の東部ツングース族の中でオルチヤ即ちマングーン族はアムール河口に、オロツイ族は下アムールとアムール海間に、オロチョン則ち馴鹿ツングースはレナ河支流のオレクマ河に、ゴルド族は下アムールとウスリ河に、オロツコ族は東樺太及び附近のシベリア本土に居住してゐる。

樺太北端、アムール三角洲の北部本土のギリヤーク族はアイヌと混血してゐるやうに思はれる。バイカル湖の東、西、トランスバイカリヤ、イルクツクに擴がつてゐるブリヤート族は非常な異質的要素を含んでゐる。

幅　指　數

カムチヤダール		ユカギール		ツングース						ヤクート	
				ギシガ		コリマ		アナデイル			
♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀
63	65	59	36	46	69	10	6	23	9	-	57
27.0	40.0	10.0	17.0	24.0	13.0	-	-	-	-	-	3.5
53.9	46.1	44.0	36.0	45.6	58.1	-	-	-	-	-	10.6
19.1	13.9	41.0	47.0	30.4	27.5	-	-	-	-	-	61.4
-	-	5.0	-	-	1.4	-	-	-	-	-	24.5
70	72	75	75	72	73	74	74	74	75	-	74
84	83	87	85	84	87	83	84	85	83	-	90
78.5	77.4	80.4	80	78.7	79.3	78.5	79.4	80.8	80.3	-	83.3
±2.4	±2.0	±2.0	±2.1	±2.5	±2.0	±2.0	±3.0	±2.2	±2.1	-	±2.5

最　大　長

カムチヤダール		ユカギール		ツングース						ヤクート	
				ギシガ		コリマ		アナデイル			
♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀
173	168	173	171	182	172	187	184	181	174	-	170
200	193	205	197	205	200	203	195	207	196	-	200
188	182.9	191.4	185.2	191.4	186.5	192.5	188.9	191.6	184.1	-	183.3
±4.4	±4.4	±4.6	±4.0	±4.3	±3.5	-	-	-	-	-	±4.7

最　大　幅

138	130	143	139	144	137	146	140	145	144	-	141
160	153	169	159	161	158	157	157	165	153	-	165
147.6	141.4	153.5	148.1	152.8	147.8	151.2	150.0	154.9	148.8	-	152.0
±4.7	±3.6	±4.3	±3.1	±3.4	±3.2	-	-	-	-	-	±3.6
63	66	70	39	51	72	10	6	22	9	-	61

ン・ブロドスキ)

カムチヤダール		ユカギール		ツングース						ヤクート	
				ギシガ		コリマ		アナデイル			
♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀
63	65	70	39	52	72	9	-	22	8	-	61
44.4	53.9	85.7	82.1	76.9	84.7	77.8	-	77.3	62.5	-	65.6
39.7	32.3	14.3	15.3	15.4	13.9	-	-	13.6	25.0	-	27.5
9.5	13.8	-	2.6	5.8	1.4	1.1	-	9.1	12.5	-	3.3
6.4	-	-	-	1.9	-	1.1	-	-	-	-	1.6
1470	1400	1440	1380	1400	1380	1530	-	1440	1380	-	1376
1740	1600	1650	1570	1720	1560	1710	-	1680	1580	-	1630
1601	1496	1560	1470	1565	1465	1588	-	1574	1482	-	1488
±3.9	±4	±4	±3.2	±4.5	±3	±5	-	±4.1	±5	-	±3.5
105		90		100		-		92			

頭形長

	アジアのエスキモ		チユクチ		コリヤーク ギシガ區		コリヤーク カムチヤツカ	
	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀
計測員數	60	80	148	50	169	132	24	19
長頭型(76. チツイ下)	8.3	13.8	5.4	4.0	6.5	12.2	-	-
中頭型(76.5—80.9)	45.0	45.0	32.4	30.0	47.3	41.6	-	-
短頭型(81.0—85.9)	38.4	38.7	46.6	48.0	42.7	44.7	-	-
過短頭型(86.0 以上)	8.3	2.5	15.6	18.0	3.5	1.5	-	-
最小	74	74	75	74	75	75	74	74
最大	90	89	96	88	86	86	81	82
平均	80.8	79.7	82.0	81.8	80.3	80.0	78.1	78.0
平均偏差	±2.5	±2.3	±2.4	±2.4	±2.2	±2.2	±1.6	±2.0

頭形

	アジアのエスキモ		チユクチ		コリヤーク ギシガ區		コリヤーク カムチヤツク	
	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀
最少	171	172	173	171	176	169	180	175
最大	203	197	204	196	200	202	200	195
平均	189.8	184.5	188.2	181.9	189.3	183.8	191.8	186.0
平均偏差	±4.7	±4.2	±5.5	±4.5	±4.0	±4.4	±4.6	5.2

頭形

最少	143	135	139	140	139	136	144	138
最大	165	156	168	159	166	160	155	150
平均	153.0	146.8	153.4	148.9	151.8	147.0	149.7	144.0
平均偏差	±3.4	±3.5	±3.8	±3.0	±3.2	±3.6	±2.5	±2.1
計測員數	60	80	148	49	173	173	24	19

身長（ヨヘルソ

	アジヤのエスキモ		チユクチ		コリヤーク ギシガ區		コリヤーク カムチヤツク	
	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀
	61	80	148	49	173	133	24	19
少 ♂1600粍以下（パーセント） ♀1500 〃 〃	41.0	43.7	43.3	40.9	58.4	60.9	37.5	15.8
低 ♂1601—1670粍 〃 ♀1501—1550粍 〃	32.8	32.6	30.4	30.6	27.4	32.3	37.5	52.6
高 ♂1651—1700粍 〃 ♀1551—1600粍 〃	21.3	20.0	15.0	20.4	12.2	6.0	20.8	31.6
大 ♂1701粍以上 〃 ♀1601粍以上 〃	4.9	3.7	11.3	8.1	-	0.8	4.2	-
最小(粍)	1520	1400	1500	1380	1490	1380	1530	1430
最大(粍)	1730	1620	1780	1630	1700	1610	1710	1600
平均	1623	1518	1622	1522	1596	1491	1620	1530
平均偏差	±4	±4	±4.9	±4.6	±3.8	±3.6	±3.7	±3.2
女性平均差(男子より小)	105		102		105		90	

頭形の長幅指數

號數	ウラルアルタイ及他の北東アジア民族	員數 ♂	員數 ♀	平均頭形長幅指數 ♂	平均頭形長幅指數 ♀	性差別
1	アイヌ(小金井)	95	11	77.3	78.04	+0.09
2	北海道のアイヌ(ドニケ)	11	–	77.8	–	–
3	日本人(ドニケ)	78	–	78.5	–	–
4	ワルジヤの支那人(イワノフスキ)	30	–	78.41	–	–
5	オスチヤツク(イワノフスキ)	195	–	79.23	–	–
6	北ツングース(マイノフ)	11	–	81.39	–	–
7	チユクチ(オルスフエフ)	14	–	81.79	–	–
8	カザン・タタール(イワノフスキ)	206	37	82.08	81.84	0.24
9	朝鮮人(ドニケ)	11	–	82.06	–	–
10	トランスバイカリヤのツングース(タルコ・ヒリンツエウイツ)	35	–	82.23	–	–
11	滿洲族(ボヤルコフ)	–	–	82.32	–	–
12	ヤクート(ウイタチエウスキ)	46	15	82.33	52.94	+0.61
13	バシキル(イワノフスキ)	536	–	82.53	–	–
14	カルムツク(イワノフスキ	285	–	82.57	–	–
15	ヤクート(マイノフ)	207	62	82.66	80.82	–1.84
16	南ツングース(マイノフ)	87	10	82.69	82.26	–0.43
17	オロチヨン(イワノフスキ)	87	–	82.81	–	–
18	ヤクート(ヘツケル)	139	–	83.01	–	–
19	ソヨト(イワノフスキ)	72	20	83.03	82.59	–0.46
20	サモエド(イワノフスキ)	88	–	83.95	–	–
21	ラツプ(イワノフスキ)	24	–	84.00	–	–
22	トルゴート(イワノフスキ)	103	–	84.73	–	–
23	滿洲族(ウジフアルヴイ)	–	–	84.91	–	–
24	ブリヤート(イワノフスキ)	816	–	85.89	–	–
25	ギリヤーク(ドニケ)	20	–	86.03	–	–
26	カラ・キルギス(イワノフスキ)	66	–	86.17	–	–
27	キルギル(イワノフスキ)	374	–	87.10	–	–
	エスキモと北太平洋のインデイアン					
1	グリーンランドのエスキモ(ドニケ)	614	–	76.08	–	–
2	アラスカの 〃 (ボアス)	114	–	79.02	–	–
3	ハイダス(ドニケ)	63	–	82.07	–	–
4	ベラワーラ(ボアス)	32	–	83.04	–	–
5	シユースワツプ(ボアス)	72	–	84.09	–	–
6	サリシヤン(ハリソン湖)(ボアス)	35	–	88.08	–	–

北東アジアのウラルアルタイ等民族の平均身長

♂	員數 ♂	員數 ♀	♂粍	♀粍	性別差粍
a) 小民族(1600粍以下)					
スカンデイナヴイヤのラツプ(ドニケ)	259	–	1,529	–	–
エニセイオスチヤツク(ドニケ)	25	–	1,540	–	–
オロチヨン(マルガリトフ)	37	8	1,545	1,443	102
北ツングース(マイノフ)	11	–	1,548	–	–
ロシアのラツプ(イワノフスキ)	37	–	1,559	–	–
サモエド(イワノフスキ)	84	46	1,550	1,143	120
アイヌ(小金井)	91	69	1,567	1,471	96
オブ・オスチヤツク	195	27	1,579	1,441	138
日本人(軍人)(ドニケ)	2,500	–	1,585	–	–
カラガシ(サレツキ)	20	10	1,589	1,455	134
日本人(上流階級)	1,100	–	1,590	–	–
b) 低身長(1601—1650粍)					
ヤクート(ウイタチエウスキ)	46	16	1,607	1,498	109
ヤクート(マイノフ)	207	62	1,624	1,512	112
ブリヤート(イワノフスキ)	825		1,631	–	–
トルゴート(イワノフスキ)	168	–	1,631	–	–
南ツングース(マイノフ)	86	7	1,631	1,530	101
トランスバイカリヤのツングース(タルコ・ヒリンツエウイツ)	45	–	1,638	–	–
カルムツク(イワノフスキ)	305	19	1,640	1,504	136
キルギス(イワノフスキ)	378	52	1,640	1,511	129
カザン・タタール(ヴアルシキン)	206	37	1,645	1,521	124
沿岸チユクチ(ドニケ)	37	–	1,649	–	–
c) 高民族(1651—1700粍)					
支那人(イワノフスキ)	79	–	1,653	–	–
バシキル(イワノフスキ)	611	–	1,655	–	–
チユクチ(スルスフエフ)	14	–	1,660	–	–
カラキルギス(イワノフスキ)	65	–	1,673	–	–
シボース〔滿洲ツングース〕(ドニケ)	38	–	1,675	–	–

	平均長幅指數 ♂	平均長幅指數 ♀	性別差
カムチヤツカのコリヤーク	78.1	78.0	– 0.1
カムチヤダール	78.5	77.4	– 1.1
コリマのツングース	78.5	79.4	+ 0.9
ギシガの 〃	78.7	79.3	+ 0.6
ギシガのコリヤーク	80.3	80.0	– 0.3
ユカギール	80.4	80.0	– 0.4
アナデイルのツングース	80.8	80.3	– 0.5
アジアのエスキモ	80.8	79.7	– 1.1
チユクチ	82.0	81.8	– 0.2
ヤクート	83.1	83.3	+ 0.2

形顔學的顔面指數

	アジアのエスキモ		チュクチ		コリヤーク ギシガ		コリヤーク カムチヤツク		カムチヤダール	
測定員數	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀
	60	78	126	50	171	133	—	○	63	65
廣顔型(74.9以下)百分率	-	-	-	-	1.2	1.5	-	-	4.2	2.5
中顔型(75.0—89.9) 〃	55	73.1	69	80	82.3	87.2	-	-	80.9	93.0
狹顔型(90.0以上)	45	26.9	31	20	17.5	11.3	-	-	14.9	4.5
最小	76	80.0	77	76	73.0	71.0	-	-	71.0	74.0
最大	100	99.0	10.2	98	97.0	98.0	-	-	97.0	93.0
平均	888	89.7	88.0	86.3	85.5	84.3	-	-	83.3	81.6

	ユカギール		ツングース ギシガ		ツングース コリマ		ツングース アナデイル		ヤクート	
測定員數	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀
	56	36	47	68	—	—	—	—	—	38
廣顔型(74.9以下)百分率	—	—	2.1	4.4	-	-	-	-	-	—
中顔型(75.0—89.9) 〃	71.4	91.7	87.2	86.8	-	-	-	-	-	86.9
狹顔型(90.0以上)	28.6	8.3	10.7	88.0	-	-	-	-	-	13.1
最小	77.0	75.0	70.0	73.0	-	-	-	-	-	76.0
最大	97.0	93.0	94.0	96.0	-	-	-	-	-	95.0
平均	86.0	84.0	84.4	83.0	-	-	-	-	-	84.0

頭形長高指數

a) (ヨヘルソン・ブロドスキの計測せる女性)

員數	ヤクート	ツングース	ユカギール
	52	27	27
扁頭型(72以下)	82.7 %	77.8 %	85.2 %
正頭型(72.1—75.0)	13.5 〃	14.8 〃	14.8 〃
高頭型(75.1以上)	3.8 〃	7.4 〃	—
最小指數	60	59.0	58.2
最大 〃 〃	79	76.5	75.0
平均	69	66.7	65.2

b) (他の民族)

	員數 ♂	員數 ♀	♂	♀	性別差
アイヌ(小金井)	94	70	64.60	66.20	+ 1.60
南部ツングース(マイノフ)	80	-	65.22	-	-
カルムツク(イワノフスキ)	161	-	66.40	-	-
バシキール(イワノフスキ)	193	-	67.34	-	-
カザン・タタール(イワノフスキ)	204	32	68.06	68.19	+ 0.13
ヤクート(マイノフ)	100	50	69.10	66.47	— 2.63
北ツングース(マイノフ)	11	-	69.40	-	-
ブリヤート(イワノフスキ)	100	-	69.56	67.56	— 2.00
トルゴート(イワノフスキ)	113	-	69.87	-	-
ヤクート(ウイタチエウスキ)	44	15	70.38	72.14	+ 1.76
オステイヤク(イワノフスキ)	58	-	70.96	-	-
チユクチ(オルスフエフ)	14	-	71.89	-	-
カラキルギス(イワノフスキ)	40	10	72.04	75.34	+ 3.30
サモエド(イワノフスキ)	20	10	72.08	74.02	+ 1.94
キルギス(イワノフスキ)	129	-	73.40	-	-
クルジヤ・支那人(イワノフスキ)	30	-	77.13	-	-

鼻形指數

	ヤクート（女性）	ツングース・ユカギール（女性）
總員數	30	43
平均指數	64.6	66
最大	78.0	81
最小	55.0	53
主要變異	58—71	58—73
過狹鼻型(54.9以下)	-	2 (4.65%)
狹鼻型(55.0—69.9)	26 (86.7%)	24 (55.81%)
中鼻型(70.0—84.9)	4 (13.3%)	17 (39.54%)
廣鼻型(85.0—99.9)	-	-
過廣鼻型(100以上)	-	-

	♂	♀
ソヨト（ゴロスチエンコ）	76.20	69.50
アイヌ（小金井）	-	66.70
ドン・カルムツク（イワノフスキ）	73.90	-
ヴオルガ・カルムツク（ドニケ）	70.57	-
タールバガイ・トルグート（イワノフスキ）	60.46	-
ヌナタグミート・エスキモ（ボアス）	-	63.00
ククパグミート・エスキモ（ボアス）	-	62.87
タールタソ・インデイアン（ボアス）	-	62.87

第三節　西部シベリア地方

エニセイの西のシベリアに住む種族はフン語を用ひてゐる中頭型の古北極洋人種である。サモエドの南に居るオステイヤク族はトボルスク地方の北部からオブ河口、更に北トムスク地方とエニセイにまで及んでゐる。

ヴオグール（マニザ又はスオミ）はベレゾフからトボルスクまでのオブ川の中流及びウラルの間に住んでゐる。兩者とも褐色毛が優勢で頭は低く顔は短く顴骨はサモエド程秀でてはゐない。

彼等は中鼻（オビのオステイヤクは鼻形指數七六・五、北方ヴオグールは鼻形指數八七・一）で涙阜襞は非常に稀である。

アツパー・エニセイ地方にはクラーヤルスクとミヌシンスクとの間には前者に類似せる而も石器は西歐洲と後期ムステリヤンやオーリナシヤンのものと類似してゐる獵民が其の當時形成し始めた黃土帶に住んでゐた。

エニセイの上流地方シヤンスク（サヤン）山脈北部は現今のミヌシンスク地方に中心をもつた古代文化の地方である。此等の古きエニセイアンは農民であつて金、銀、青銅を使用してゐたが鐵を知らなかつた。鐵は後に南方よりの新來者の流入と共に移植されたものである。エニセイとオルコーンに於ける「ピサニツイ」Pisanitzy（繪畫文字）（トムゼン Thomsen、ラドロフ Radloff 解讀）の製作者はエニセイアンと云はれてゐる。アヌチン Anuchin の體質測定に依ればエニセイアンは平均身長一・五八七糎、頭形指數八三・一、顏面指數七九・一である。

エニセイ溪谷の狀態は古きトウバ民族のおこることを得せしめた。後に此の同じ適地狀態は蒙古の遊牧民を誘ひ其のためエニセイ族は亡ぼされてしまつた。

紀元前三世紀トルコ・ウイグルが南蒙古の支那國境から來り、紀元四世紀から八世紀まで全蒙古はエニセイ以北チユリム河までも其の版圖とした。

原始ウイグルの一分派であるキルギス部族は上エニセイ盆地に勢を得て後蒙古人に奪はれた。

ウイグル族に征服されたエニセイ人の一部は現今トウバ（ウリアンカイ）

族として現はれてゐる該森林中に逃避してしまつた。

ロシア人は彼等をソヨト族と呼んでゐるが、然し彼等は中央シベリアのソヨト族と何等の共通點をもつてゐないのである。他のものは處々に行き現今のサモエト、歐洲のラップ族となつたものである。

トウバ族は混血種族であつて殆んど純蒙古人の特徴を持つものから典型的歐洲人の特徴をもつてゐるものまでの諸階程の變異を含んでゐる。馴鹿を飼養する部族が最も蒙古化してゐない。エニセイ・オステイヤク族の大部分は褐色毛を持ち、他のエニセイ族と同じく頭型は扁頭型である。彼等はロワー・ツングースカ河とトウルカンスクまでのストニ・ツングースカ河との間のロワー・エニセイ河畔に居住してゐる。

サモエド族は内國及びウラル山を越え、チエスカヤ灣から遙か東方エニセイ河とレナ河との間のカタンガ灣に及ぶ沿岸島嶼に分布してゐる。北方群はユラクと呼ばれてゐる。

サモエド族の平均鼻形指數は七七、涙阜襞はないが眼は普通蒙古式の狹細と斜度をもつてゐる。

此等の古北極洋人種の大多數の身長は低と中位との限界線中にある。

一般にユーラジヤの身長最低民族は成表に示されてゐる如く大陸の最北部を占め(ラップ、サモエド、オステイヤク、ユカギール)てゐるか、アジアの北東端に於ては平均下であり(チユクチ、アジア・エスキモ)、其の南方は(コリヤーク、カムチヤダール、或ツングース部族)人低身長になつてゐる。ヤクートも又平均下身長であるが、彼等は北極地域に近住したものである。

身長の地理的分布を考察するとユーラジヤに於て極地部族の身長は西から東へ行くに從つて(ラップ、サモエドに始まる)增加するが、米國北極圈に於ては逆になつてゐる。東部エスキモが最低の身長である。アラスカ及びチユクチ半島のエスキモが最高である。それでラプランドからグリンランドに伸びてゐる餘北極及亞北極帶を見ると低身長の境帶が高身長の中央トランス・ベーリング地帶を圍繞してゐるのを知るのである。

身長の分布

低身長(一六〇〇粍以下)

オロチ	一五四五
サモエド	一五五〇
ユカギール	一五五九
ラップ	一五五九
アイヌ	一五六七
北方ツングース	一五七〇
ラブラドル・エスキモ	一五七五
日本人	一五七八
オステイヤク	一五七九
ヴオグール	一五八〇
シユヴアシ	一五八一
アレウト	一五八四
カラガシ	一五八七
コリヤーク	一五九六
カムチヤダール	一五九七

平均下身長(一六〇一—一六四九粍)

東部エスキモ	一六〇六
バロー岬エスキモ	一六一五
ヤクート	一六一七
ペルミヤク	一六一八
ヴオテイヤク	一六一九
チユクチ	一六二〇

アジア・エスキモ	一六二三
印度人	一六二三
猶太人(ロシアの)	一六二六
ツングース	一六二七
チエレミス	一六二八
チリヤン	一六二九
ブリアート	一六三一
エジデカ	一六三三
トルグート	一六三六
テレンギット	一六三六
猶太人(ジョルジヤの)	一六三六
ブラック・タタール(アルタイ)	一六三九
キルギス	一六四〇
カルムック	一六四〇
ウデイーン	一六四三
クミク	一六四四
タタール(カザン)	一六四五
ジョルジヤ人	一六四六
ジプシー(歐洲)	一六四六
ミングレリアン	一六四七
平均上身長(一六五〇—一六九九粍)	
メスチエルヤク	一六五〇
支那人	一六五三
ポーランド人	一六五四
バシキル	一六五五
大ロシア人	一六五七
リトワニヤ人	一六五九
アフガン	一六五九
ドウンガン	一六五九
ジョルスキ猶太人	一六五九
クリミヤのタタール	一六六一
トルコ人	一六六八
白ロシア人	一六六八
ガルチヤ	一六六九
小ロシア人	一六七〇
アイソール	一六七一
フイン	一六七一
アルメニヤ人	一六七三
カラ・キルギス	一六七三
カラチエウツイ	一六七五
ペルシヤ人	一六七七
カバールデイン	一六七八
ウズベック	一六七九
レスギン	一六八一
クルド	一六八四
アゼルバイジヤン	一六八五
オセット	一六九二
タジーク	一六九三
サルト	一六九五
イメレテイン	一六九六
トルコマン	一六九六
高身長(一七〇〇粍以上)	
スヴアネト	一七〇〇
ジプシー(前方アジヤ)	一七〇一
タート	一七〇一
エストニア人	一七〇三
レット	一七〇五
インゲンシ	一七一三

カレリアン　一七二〇
リヴォニア人　一七三六

頭形指數から見るとイラニアン諸國(ペルシヤ人、エツイデ、クルト)と言語學的にトルコ化されたイラニアン(タート、アゼルバイジヤン、アフガン)は中頭型である。印度人及ジプシー(內部アジアの)も又中頭型である。フイン系の民族も又多く中頭型である。(ヴオグール、オステイヤク、エストニア人、リヴオニヤ人、フインランドのフイン)。

トルコ人及び蒙古人は短頭型又は過短頭型と云はれてゐる。主なる蒙古種族のカルムツク、トルグート、ブリヤートは短頭型であり、トルコ族、カラ・キルギス、クミク、キルギスは過短頭型である。例外をなすものはトルコ部族に屬する長頭型のトルコマンであるが、これはペルシヤ人との混血の結果であらうと云はれてゐる。

ドウンガンも又長頭型(七六・〇五)である。或る學者は彼等を支那化したトルコ族と考へてゐるが、然し支那の回教徒であると信じてゐる人もゐる。全支那人の平均指數は七九・六一であるがクルジヤの支那人は七八・四一、北部支那のものは七七・〇である。更にフイン系のラップは八四の短頭型を持ちツイリヤンは八六・三六の過短頭型を持つてゐる。アメリカノイド・ギリヤークも又過短頭形指數を持つてゐるが、近住民のアイス、ツングースは七九と八三—八〇である。アルメニヤ人の過短頭形指數は彼等がアリヤン系のイラニヤン群に屬すると云ふ學說に反證を與へるものである。

	頭形指數
長頭型(七六・四以下)	
印度人	七五・二
ジプシー(前方アジア)	七五・二
ラブラドル・エスキモ	七五・五三
トルコマン	七五・六三
ドウンガン	七六・〇五
中頭型(七五・六—八〇・九)	
アイヌ	七七・三
東部エスキモ	七七・三
アゼルバイジヤン	七七・五七
エジデ	七七・八六
ヴオグール	七七・九〇
日本人	七八・一五
クルド	七八・二九
支那人(クルジヤ)	七八・四一
タート	七八・六二
ペルシヤ人	七八・七二
カムチヤダール	七八・九〇
アラスカ・エスキモ	七九・二〇
チエレミス	七九・二〇
オステイヤク	七九・二三
エストニア人	七九・二六
ジツト	七九・五二
北部ツングース	七九・六
アルタイ・タタール	七九・六四
リヴオニア人	七九・九
チヴアンツイ	七九・九
コリヤーク	八〇・〇
アフガン	八〇・二四
ユカギール	八〇・四
フイン	八〇・六七

短　頭　型（八一・〇—八五・九）

ル　リ	八一・一六
カレリアン	八一・一九
アジア・エスキモ	八一・二〇
メスチエルヤーク	八一・六四
リトワニア人	八一・八八
白ロシア人	八一・八七
チュクチ	八一・九〇
ヴオテイヤク	八一・九四
オセテイン	八一・九五
アブカースツイ	八二・〇二
タタール（カザン）	八二・〇八
アラブ	八二・一〇
ポーランド人	八二・一三
イングシ	八二・一四
小ロシア人	八二・三一
チエチエン	八二・三七
大ロシア人	八二・三九
ベルミヤク	八二・四〇
シボ（滿洲族）	八二・四二
ミングレリアン	八二・四四
ツングース	八二・四六
バシキル	八二・五三
ユダヤ人（ロシアの）	八二・五六
カルムック	八二・五七
ヤクート	八二・六〇
オロチ	八二・八一
ジプシー（タウリデ）	八二・九三
ソヨト	八三・〇三
イメレテイン	八三・〇九
モルドヴア	八三・二一
タタール（カウカス）	八三・四九
カバールデイン	八三・七三
アレウト	八三・八〇
カラチエウツイ	八三・八八
サモエド	八三・九五
ラツプ（ロシア）	八四・〇〇
サルト	八四・二二
アフガン	八四・二四
タタール（クリミヤ）	八四・四九
トルコ人	八四・七〇
トルグート	八四・七三
カライト	八四・八〇
タジーク	八四・八五
ジョルジヤ人	八五・三六
ブリヤート	八五・八七

過　短　頭　型（八六以上）

テレンギット	八六・一四
カラ・キルギス	八六・一七
ウズベック	八六・二六
ギリヤーク	八六・三〇
ツイリヤン	八六・三六
アルメニア人	八六・四六
タランチ	八六・四六
ウデイン	八六・八六
カルムック（クルジヤ）	八六・九八
クミーク	八七・〇四
キルギス	八七・一〇

レーズ	八七・四八
レスギン	八七・七四
アイソール	八七・八九

顔面指數

狹顔型(七〇)

中顔型(七〇・〇一—八〇・〇〇)

日本人	七一・三五
アラブ	七二・四六
アフガン	七三・一九
タジーク	七三・三三
カレリアン	七三・六八
ペルシヤ人	七四・三一
メツレガンツイ	七四・七〇
リトワニア人	七五・一六
クルド	七五・三二
ユダヤ人	七五・五〇
ヴオグール	七五・七七
アゼルバイジヤン	七五・八八
レーズ	七六・一四
白ロシア人	七六・二二
ポーランド人	七六・三二
ツイリアン	七六・四五
カールカ	七六・五六
大ロシア人	七六・七三
タタール(クリミヤ)	七六・六七
バシキル	七七・八〇
フイン	七七・一五
タランチ	七七・二六
ウズベック	七七・四一
アイヌ	七八・〇七
小ロシア人	七八・一二
アルメニア人	七八・三一
インクシ	七八・三七
イメルテイン	七八・三八
タタール(カザン)	七八・六四
ヴオテイヤク	七八・七〇
アイソール	七八・七三
リル	七九・〇九
ヤクート	七九・二五
ジヨルジヤ人	七九・四三
クミク	七九・四七
オステイヤク	七九・六〇
オセテイン	七九・六三
ウデイン	七九・六五
ブリヤート	七九・七二
カバルデイン	七九・七九
カルムツク	七八・八七

廣顔型(八〇・〇一)

ミングレリアン	八〇・〇八
テレンギト	八〇・三二
キルギス(中部群)	八〇・四二
オセテイン	八〇・八二
ペルミヤク	八一・〇六
ツングース	八一・二六
レスギン	八一・七七
ジプシー	八四・二三
トルグート	八五・二〇

比較表

	頭形指數	顏面指數	
ジプシー（前方アジア）	七七・二〇	八四・二三	八二・三七
アイヌ	七七・三〇	七八・〇七	八二・三九
アゼルバイジヤン	七七・五七	七五・八八	八二・四〇
ヴオグール	七七・九〇	七五・七七	八二・四四
日本人	七八・一五	七一・三五	八二・四六
ジプシー（歐洲）	七八・三六	七九・二一	八二・五三
クルド	七八・二九	七五・三二	八二・五六
ペルシヤ人	七八・七二	七四・三一	八二・五七
支那人	七九・六六	七三・七四	八二・六〇
アフガン	八〇・二四	七三・一九	八三・〇九
フイン	八〇・六七	七七・二五	八三・七三
アジアのエスキモ	八一・〇〇	……	八四・四九
ルリ	八一・一六	七九・〇九	八四・七三
カレリアン	八一・一九	七三・六六	八五・三六
メスチエルヤク	八一・六四	……	八五・八七
リトワニア人	八一・八八	七五・一六	八六・一四
白ロシア人	八一・八七	七六・二二	八六・三六
チユクチ	八一・九〇	……	八六・四六
ヴオテイヤク	八一・九四	七八・七八	八六・八六
オセテイン	八一・九五	八〇・八二	八七・〇四
アブカースツイ	八二・〇二	……	八七・一〇
タタール（カザン）	八二・〇八	七八・六四	八七・四八
アラブ	八二・一〇	七二・四六	八七・七四
ポール	八二・一三	七六・三二	八七・八九
イングシ	八二・一四	七八・三七	……
小ロシア人	八二・三一	七八・一二	七八・七三
チエチエン	八二・三七	……	八一・〇〇
大ロシア人	八二・三九	七八・七三	八〇・〇八
ペルミヤク	八二・四〇	八一・〇〇	八一・二六
ミングレリアン	八二・四四	八〇・〇八	七七・八〇
ツングース	八二・四六	八一・二六	七五・五〇
バシキル	八二・五三	七七・八〇	七九・八七
ユダヤ人（ロシア）	八二・五六	七五・五〇	七九・二五
カルムツク	八二・五七	七九・八七	八八・三八
ヤクート	八二・六〇	七九・二五	七九・七九
イメレテイン	八三・〇九	八八・三八	七六・九七
カバルデイン	八三・七三	七九・七九	八五・二〇
タタール（クリミヤ）	八四・四九	七六・九七	七三・三三
トルグート	八四・七三	八五・二〇	七九・四三
タジーク	八四・八五	七三・三三	七九・七二
ジヨルジヤ人	八五・三六	七九・四三	八〇・三二
ブリヤート	八五・八七	七九・七二	七七・四一
テレンギト	八六・一四	八〇・三二	七六・四五
ウズベツク	八六・二六	七七・四一	七八・三一
ツイリヤン	八六・三六	七六・四五	七七・二六
アルメニヤ人	八六・四六	七八・三一	七七・五五
タランチ	八六・四六	七七・二六	七九・四七
ウデイン	八六・八六	七七・五五	八〇・四三
クミク	八七・〇四	七九・四七	七六・一四
キルギス	八七・一〇	八〇・四三	八一・七七
ラーズ	八七・四八	七六・一四	七八・七三
レスギーン	八七・七四	八一・七七	
アイソール	八七・八九	七八・七三	

一般に頭形と顏形との比率には一定の關係があるのであつて、廣頭は廣

顔を伴ふことが普通であるが、グリーンランド・エスキモは此の例外をなし甚だしき長頭と甚だしき廣顔を有してゐる。

アイヌ（顔面指數七八・〇七、頭形指數七七・〇三）、蒙古系のトルグート（八五・二と八四・七三）、歐洲ジプシー（七九・二六と七八・三六）前方アジアジプシー（八四・二三と七五・二〇）フイン系オステイヤク（七九・六と七九・二三）は大なる顔面指數を持つてゐる。他の種族は一般に頭幅に比べると狹顔を持つてゐる。兩指數の差違限域は一―一二單位である。蒙古部族はトルコ部族よりも其の差異が少ない。それでブリヤートとカルムツクの頭形指數は顔面指數よりも夫々六と三單位大である。然しトルコ系キルギスとウズベックの頭形指數は顔面指數よりも夫々七と九單位だけ大である。最大なる差違はアジアのヤフエタイド Japhetides とアリヤン人の或る部族に起つてゐる。カウカス人のラーゼとトルケスタンのタジークの顔面指數は夫々一一と一二單位だけ頭形指數よりも小である。

第四節　エスキモ居住地域

エスキモ族に關しては事實的な考察が充分なされてゐないのであるが、最も興味ある說はエスキモ族は直接歐洲の洪積世人類（ネアンデルタール人、又はクロ・マニョン及びオベルカツセル人）に其の起源を遡ることを得、且つ直接に北アジアの蒙古人と結合して考へてゐるものである。

移住してゐる廣大な地域の北邊は約緯度七一度まで上つてゐる。

言語及び他の文化は正しく單一と見做されるが多少地域的個別性を表はしてゐる。從つて

（一）　アラスカ群は十二以上の部族からなりビハン Byhan に依れば人口約一萬四千人である。彼等は比較的氣候の最も良い北方に住む一部は森林地に居住し往々インデイアン及びアジア人と接觸したので他のエスキモよりも文化內容が豐富で多樣である。

（二）　マツケンジー下流のエスキモ。

（三）　中央エスキモ、バシユールスト入江から東方ハドソン灣の北西岸に到るカナダ大陸に住む十八部族及び更に遠くの北岸の東半部、バフイン島、グリーンランドの西岸北緯七八度附近に住し人口千五百人である。

（四）　ラブラドル・エスキモ、人口千五百。

（五）　グリインランド・エスキモ、人口、東岸には五百、西岸には一萬人住んでゐる。

（六）　ベーリングアジア沿岸エスキモ（ユイト）

の六群に分つことが出來る。

エスキモの語は「生肉喰人」Esqdlmatjik を意味しアルゴンキン種族のアブナキ族が與へた名稱であつて自らはイヌイートと稱してゐる。

身長は平均一・六二米であるが南アラスカのものは一・六六米、ラブラドル、グリーンランドのものは一・五八米である。

頭形指數はアラスカのものは七九、グリーンランドのものは七六・八、北部のものは頭蓋指數が七〇―七二であつて高頭・長頭型に屬してゐる。皮膚は黃褐色、眼裂は直狀で紅彩は黑色、顴骨隆起し鼻も相當高く顔は圓形、唇は厚い。毛髮は黑色粗剛で出生兒には日本人と同じく臀部に青色の所謂蒙古斑點が現はれる。

アレウト族はアレウト列島に居住するエスキモに類する民族であつて、エスキモ方言を用ひてゐるが眞正のエスキモ族に反し短頭型である。コンマンドル島のものはロシア人、アイヌの影響を受けてゐる。

一般に云へばエスキモは略、同じ氣候的環境に生活し言語、慣習に於て

北太平洋沿岸のエスキモとインデイアンの身長

	員數 ♂	員數 ♀	♂ 粍	♀ 粍	性別差 粍
A）小　民　族（1600粍以下）					
ラブラドル・エスキモ	26	–	1575	1480	95
B）低　民　族（1601—1650粍）					
サリシヤン(ハリソン湖 英領カナダ)(ドニケ)	90	–	1613	–	–
フレーザー河口のサリシヤン	30	–	1618	–	–
グリーンランド・エスキモ(ドニケ)	614	–	1621	–	–
カキウトル・インデイアン(ドニケ)	55	–	1639	–	–
C）高　民　族（1651—1700粍）					
アラスカ・エスキモ(ボゴラス)	34	–	1658	1551	107
ベラ・クーラ・インデイアン(ドニケ)	26	–	1661	–	–
ツイムシヤン・インデイアン(ドニケ)	37	–	1666	–	–
シユースワツプ・インデイアン(ボゴラス)	114	–	1673	1557	116
チヌツク・インデイアン(ボゴラス)	22	–	1691	–	–

同質的な民族であるが、內部アラスカ群はインデイアンのアサパスカン、アルゴンキンの影響を受け、ユーコン附近に住むものは北西海岸及びロシア民族の影響を受け、ベーリング海峽のものはシベリア民族の影響を受けてゐる。

アラスカのエスキモは中部及び南部群よりも身長が高く、平均身長男性は約一六八糎であつて東部エスキモよりも一〇糎高い。中部エスキモ（サザンプトン島）はヒルドリツカに從へば平均約一六二糎である。西部エスキモも女性の平均は一五八糎であつてハドソン灣地方の男性の身長に近い（一五八糎ボアス）。アラスカの女性體型は東部に於けるものよりも細長であつて顏幅も非常に小さい。西部に於ける體型の此の變化は環境の相異に基づくか、インデイアン又はアジア部族との混血に基づくかは決定されてゐない。

然し北部アラスカのエスキモはアサパスカン及びデイオメデス島を通じてシベリアと交易してゐたのである。

然し次表に示す如くエスキモも部族の人種的親緣性を示す頭形、頭高、鼻形、眼窠の平均指數は三群とも非常に近似してゐるのであつて、長頭型、巨眼窠上緣、狹鼻型が共通である。

指數から見ると西部エスキモは東部エスキモよりも中部エスキモに近い關係がある。

頭形指數は頭高指數、高幅指數が東から西に行くに從つて減ずるに係はらず增加してゐる。

東部(ラブラドルとグリーンランド)　中部(サザンプトン島)
西部(アラスカ)エスキモの指數變異比較表

指數	頭蓋數	地方	平均	偏差 最大	偏差 最小	變異
頭形(長幅)	20	東部	71.5	75.4	65.8	9.6
〃	14	中部	74.55	78.2	68.6	9.6
〃	21	西部	74.748	79.66	70.35	9.3
垂直(長高)	9	東部	73.5	79.2	69.3	9.9
〃	14	中部	74.3	79.2	66.2	13.0
〃	21	西部	73.673	76.76	68.84	7.92
眼窠	8	東部	88.65	94.7	78.6	16.1
〃	3	中部	90.87	105.4(?)	82.4	23.0
〃	21	西部	89.98	99.50	83.95	15.55
鼻形	7	東部	45.55	50.0	40.3	9.7
〃	13	中部	43.05	48.4	3.87	9.7
〃	21	西部	41.072	48.0	33.93	15.07
顔面	6	東部	54.36	62.3	49.3	13.0
〃	13	中部	52.65	54.9	46.1	8.8
〃	21	西部	53.09	59.29	44.05	15.24
下顎顴骨	7	東部	80.9	91.5	74.6	16.9
〃	…	中部	…	…	…	…
〃	21	西部	75.92	89.20	71.74	15.46
上顎齒槽	7	東部	112.1	120.0	105.3	14.7
〃	13	中部	119.4	127.3	106.7	20.6
〃	18	西部	120.545	129.79	106.78	23.0
地平周徑	10	東部	513.5	550.0	476	74
〃	14	中部	517.0	532.0	491	41
〃	21	西部	507.8	540.0	487	53

エスキモ群の頭形、頭高、高幅指數の比較表

	員數	性別	測定者	頭形	頭高	高幅
東部群——						
東グリーンランド	4	?	パンシ	72.9	74.2	101 70
西グリーンランド	21	?	ベツセルス	72.6	73.7	101.05
ラブラドル	6	?	ダツクウオース	72.08	73.05	101.34
中部群——						
スミス海峽	99	?	ベツセルス	71.37	76.91	107.96
サザンプトン島	9	男	ヒルドリツカ	74.2	74.1	99.8
サザンプトン島	5	女	ヒルドリツカ	74.9	74.5	99.4
マツケンジー——						
ヘルシエル島	9	?	ラツセル	74.6	73.5	98.76
アラスカ——						
バロー岬	16	男	ホーキス	72.65	73.24	100.68
バロー岬	5	女	ホーキス	76.06	74.45	98.01
ベーリング海峽	4	?	軍醫博物館	75.82	76.33	100.76
アレウト	15	?	ベツセルス	86.49	74.02	86.05

バロー岬のエスキモは上顏面指數（コールマンの）男性五二・四八であるが女性は低い兩顴骨幅に依つて高く五四・〇五を示してゐる。

兩別の平均は五三・〇九であるが、サザンプトン島は五二・六五である。ラブラドル、グリーンランドの顏面指數は五四・三六であつて、之は上顏面指數は各エスキモ群に於ける恒數的要素（コンスタンス）であることを示すものである。

鼻形指數はエスキモに於ては特に重要な徵表であつて蒙古體型と區別するに有用である。

頭蓋容量はバロー岬（ホーキス）のエスキモは男性平均一四二六立方糎であるがサザンプトン島（ヒルドリツカ）のエスキモは一五六三立方糎である。

中部及グリーンランドのエスキモは頭幅に比して非常に顏幅が廣いのが特徵である。一般の比率は一〇二である。

エスキモは最も狹鼻型の人種に屬するものであつてブロカは四二・三三の鼻形指數を與へてゐる。バロー岬のエスキモ（男性平均四〇・六九、女性平均四一・六二）はサザンプトン島のエスキモ（男性四二・三、女性四五・八）より少し低い。ラブラドル及びグリーンランドのエスキモはダツクウオース・ペーンに依れば平均四五・五五である。

エスキモ群の頭幅と顏幅との比率比較表

地方	頭蓋數	性別	測定者	顏幅	頭幅	比率 顏幅/頭幅
グリーンランド	5	男	デーヴイス	147	140	105
グリーンランド	5	女	デーヴイス	130	130	100
スミス海峽	85	?	ベツセルス	133	130	102
バフイン灣西岸	5	男	デーヴイス	137	135	102
バフイン灣西岸	2	女	デーヴイス	124	132	94
サザンプトン島	9	男	ヒルドリツカ	145	140	103.5
サザンプトン島	5	女	ヒルドリツカ	138	137	100.7
ヘルシエル島	9	?	ラツセル	139	137	101
バロー岬	16	男	ホーキス	141.2	137.3	102.5
バロー岬	5	女	ホーキス	132	136.2	96.8
ベーリング海峽	2	男	軍醫博物館	134	136.5	98.12
ベーリング海峽	2	女	軍醫博物館	130	131	99.24

生體計測

地方	頭形員數	性別	測定者	顏幅	頭幅	比率 顏幅/頭幅
ラブラドル	3	男	ウイルヒヨウ	147	149	99
ラブラドル	2	女	ウイルヒヨウ	134	137	98
マツケンジー（ククパグミート）	12	男	ストーン	147.8	144	102.1
マツケンジー（ククパグミート）	6	女	ストーン	139.7	141.5	99
內部アラスカ（ヌナタグミート）	12	男	ストーン	155.7	154.5	100.8
內部アラスカ（ヌナタグミート）	5	女	ストーン	144.6	142.6	101.6